

市立函館博物館

研究紀要

第 7 号

1997

市立函館博物館

研究紀要

第 7 号

1997

序

近年、地域における市民の学習意欲が高まり、当館としましては、多様化する市民ニーズに対して必ずしも十分に対応できていないという面もあろうかと存じますが、そうした要望に応えるべく、日常の調査・研究を積み上げていこうと考えております。

周知のとおり1992年から開始された青森県の三内丸山遺跡の発掘は、これまでの縄文時代のイメージを大きく塗り替え、函館空港遺跡群の発掘とあいまって地域を越えた関心の広まりをみせている中で一昨年の10月15日に当館主催の「縄文人の青函交流」と題したシンポジウムを開催したところであります。

本号には、このシンポジウムで基調講演をされた青森大学の村越潔教授に論文としてまとめていただきました。青函の両地域の人々が、縄文時代の早期から交流を開始し、晩期に至るまで盛んに行われていたことを近年の発掘などの成果をもとに論述されています。当日の熱気に満ちた会場の雰囲気をおあらためて思い起こされます。

また挿絵画家研究者の小笠原洋子氏に当市出身の梁川剛一に関する論文をいただきました。氏は遺族の梁川美恵子さんとも親しくされていますが、従来の価値体系のなかで亜流とされていた挿絵にも「全力投入であった」梁川剛一の人となりを通し作品を通して論じていただきました。当館に収蔵されている梁川剛一の挿絵原画や絵画に関する研究にも一石を投ずることと思われまふ。

次に当館の保科智治学芸員が担当して平成6・7年度にわたり開催されたワークショップの調査結果を掲載しました。これは講座の参加者が主体的に箱館戦争に係わる墓石調査を行ったものであります。学習活動の成果をこうした形で発表するのは、はじめての試みですが、機会があれば、この種のものをこれからも充実させてまいりたいと考えております。

終わりに本書の刊行にあたり、ご寄稿いただきました村越、小笠原の両氏にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げますとともに、関係各位におかれましては今後ともご指導を賜りますようお願いいたします。

1997年3月

市立函館博物館長

菅原 繁昭

目 次

序

「縄文人の青函交流」シンポジウム	1
------------------------	---

縄文人の青函交流

村越 潔	5
序 言	5
津 軽 海 峡	5
文化交流(1)	6
旧石器時代	
文化交流(2)	7
縄文時代 草創期・早期・前期・中期・後期・晩期	
文化交流(3)	12
土器以外の遺物	
ま と め	13

「箱館戦争関係墓碑」調査について

ーワークショップ「箱館戦争の史跡を探る」のまとめー

保科 智治	15
-------------	----

挿絵史にみる梁川剛一

小笠原 洋子	42
--------------	----

「縄文人の青函交流」シンポジウム

市立函館博物館シンポジウム「縄文人の青函交流」は平成7(1995)年10月15日函館ハーバービューホテルを会場に開催されました。道内外の考古学研究者や一般市民等総じて約200名が集まり、全国的に注目を集めている「三内丸山遺跡」、「函館空港遺跡群」の発掘調査の成果から縄文時代の青函文化圏について討議がなされました。ここでは、パンフレットから各報告の概要を再録します。そのなかから、村越潔先生の基調講演「縄文人の青函交流」については、概要に加えて新たにまとめていただいた論文を紹介し、シンポジウムの成果を綴りたいと思います。なお、村越先生の後半のスライド説明部分は省略させていただきましたので、ご了承ください。

基調講演 縄文人の青函交流

村越 潔

北海道と本州を隔て、潮の流れが速いことで知られる津軽海峡を縄文人は物ともせず頻りに渡海を行っていたと聞くと、多くの人々は疑念を抱くことであろう。しかしそれは紛れもない事実であり、その証拠は縄文時代の各期に及んで発見されている。地理上の位置から考えると、東北北部の青森県は本州の地を北上して来た文化を北海道へ渡し、逆に北からの文化が本州へ渡る最初の地であり、南北文化の終着または始発地として重要な役割を演じ、道南の函館市周辺もまた同様であったろう。

海峡を挟んだ南北交流の証明は、縄文時代早期から土器の形態・文様に具現されており、とくに前・中期の円筒土器をはじめ、晩期の

亀ヶ岡土器にその姿を捉えることが出来る。このほか石器・石製品の原材（黒曜石・ヒスイ）や、接着剤としてのアスファルトなどにもその証拠は顕著に現れ、自然の障害と見られがちな津軽海峡は、南北文化交流の大動脈であったと考えられよう。

■村越 潔（むらこし きよし）

1929年 北海道常呂郡野付牛町（現北見市）生まれ

1953年 日本大学文学部史学科卒

1958年 弘前大学へ赴任

1978年 弘前大学教授

1995年 弘前大学退官 青森大学考古学研究所長

青森大学教授 弘前大学名誉教授

青森県文化財保護審議会委員

青森県立郷土館協議委員

おもな著書・論文

「円筒土器文化」（雄山閣）

「青森県の原始時代」（北方新社）

「亀ヶ岡式土器」（ニュー・サイエンス社）

報告1 縄文の巨大集落三内丸山遺跡

岡田 康博

三内丸山遺跡は、日本最大の縄文集落跡である。しかしただ巨大であるだけではなく、長期間に亘って定住生活が営まれ、計画的なムラ作りが行われていたのである。大量の円筒土器や土偶が製作・消費され、他地域からも交易によって様々なものが持ち込まれた。決して閉ざされた社会ではないのである。

狩猟・採集の他にヒョウタン・マメ・ゴボ

ウなどの栽培も行われ、野生のヒエも食料としていた。集落の周りには、大量のクリの木が存在していた。これらは、縄文人が積極的に自然に対して働きかけをした結果によるものである。そして、それらは集落の前方に広がる陸奥湾と後方の広大な森林の豊かな実りによって支えられていたのは当然のことである。

三内丸山遺跡は、巨大な長期定住型集落の可能性が高い。今後の本格的な調査・解析によって、その実体が明らかになるにつれて、縄文文化を見直す大きな契機となると考えられる。

■岡田 康博（おかだ やすひろ）

1957年 青森県弘前市生まれ

1981年 弘前大学教育学部卒

青森県教育委員会青森県埋蔵文化財調査センター勤務

1992年 三内丸山遺跡調査責任者

1995年 青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室総括主査

おもな著書・論文

「考古学の世界」（ぎょうせい）

「円筒土器文化の巨大集落」（雄山閣）

「弥生時代終末の土器」

「製鉄遺跡の諸問題」

「亀ヶ岡文化の交易・ものの移動」

報告2 縄文の津軽海峡を渡ったもの

福田 友之

東北地方北部と北海道南部の遺跡の出土品には、従来から類似するものが多いことが知られているが、ここ10数年来の理化学的手法による出土品の産地分析の進展もあって、少

しずつ津軽海峡を舟で運ばれたものの中身が分かってきた。

分析された代表的なものとしては翡翠（硬玉）と黒曜石がある。翡翠は北陸の糸魚川産である。また、北海道産黒曜石を用いた石器が青森県域からも出土している。また、分析によるものではないが、北海道域には産しないはずのものも北海道の縄文遺跡から出土している。琥珀、天然アスファルト、ベンケイ貝などの貝、猪などであり、本州（以南）から海峡を越えてもたらされたものと思われる。

これらは海峡を渡ったもののほんの一部に過ぎないが、縄文時代の津軽海峡交流を具体的に物語っている。この交流がどのような内容を持ち、どのように移りかわっているのか、このような視点が今後必要になろう。

■福田 友之（ふくだ ともゆき）

1947年 青森県弘前市生まれ

弘前大学人文学部卒

東北大学大学院文学研究科修士課程終了

1973年 北海道教育委員会文化課勤務

1979年 青森県教育委員会勤務

現 在 青森県立郷土館学芸主幹

おもな著書・論文

「角川日本地名大辞典・青森」

「図説青森県の歴史」

「北日本の考古学」

「狩猟文土器考」

「津軽海峡の先史文化交流」

「北日本におけるベンケイガイ交易」

報告3 出土遺物の化学分析による 交易ルートの解明

小笠原 正明

天然アスファルトは、縄文時代の後期・晩期を中心に北・東日本において接着剤として広く使われていた。産地が秋田、山形、新潟などの日本海側に限定されているため、当時はたいへんな貴重品であったと思われる。北海道教育大学函館校の物質科学教室では、出土天然アスファルトの化学分析の方法を開発し、縄文時代におけるアスファルトの交易ルートを開明を目指した。これまでに、秋田方面のアスファルトと新潟県南部のものとの化学構造上の違いがあり、道南の南茅部出土の試料は化学成分としては秋田方面のものに似ているという結果が得られている。この講演では、このような出土天然アスファルトの化学分析を中心に、ガラスの組成分析、マイクロプロードの接着剤の化学分析、土器の胎土分析など、北海道教育大学および北海道大学で進められているいくつかの研究の成果を紹介し、青函交易ルートの役割について議論する。

■小笠原 正明（おがさわら まさあき）

1943年 岩手県盛岡市生まれ
1968年 北海道大学大学院理学研究科修士課程終了
1974年 アメリカ・ウエイン州立大学留学
1980年 ポーランド・ウッチ工科大学で研究
1984年 スウェーデン・スツーツビク研究所で研究
1992年 北海道大学工学部助教授を経て
北海道教育大学函館校教授
1995年 北海道大学高等教育機能開発総合センター教授
工学博士

報告 4 函館周辺の先史時代遺跡の概要

田原 良信

函館の先史時代遺跡の存在については、すでに江戸時代の文献に紹介されているが、本

格的には明治時代初期のエドワード・モース、ジョン・ミルン等の外国人学者の調査・報告によって明らかにされたのに始まる。

函館周辺において明治時代以降、昭和初期にかけて採集されてきた先史時代の生活用具類が、北海道独自というよりは東北地方北部との共通性が多いことが明らかとなり、かなり古い時期から海峡を往来する交流を頻繁に行っていたと考えられていた。昭和24年のサイベ沢遺跡の発掘調査によって、縄文時代前期・中期にわたる円筒土器文化の大規模な集落跡が存在したことが確実となり、また翌25年の住吉町遺跡の発掘調査により、縄文時代早期の文化層が確認されたことで、より一層東北地方との繋がりが強いことが明らかとなった。

昭和30年代以降に順次調査されてきた先史時代遺跡でも、津軽海峡を挟んだ津軽や下北地方などとほぼ同様な文化の内容のものが多く、北海道南部と東北地方北部はほとんど同一の文化圏にあることなど、青函の交流の実態が明確になってきている。ただ、交易による物質の伝播なのか、人々の移動によるものなのか、また各時代の文化は北上なのかそれとも南下なのかなど解明すべき課題は多く存在する。さらに、海流による水上交通と湊の結びつきと遺跡の立地・分布状況についても、関連性を考える必要がある。

■田原 良信（たはら よしのぶ）

1952年 北海道函館市生まれ
1975年 駒沢大学文学部歴史学科考古学専攻卒
1979年 函館市教育委員会社会教育部社会教育課勤務
1989年 市立函館博物館勤務学芸員
1994年 函館市教育委員会社会教育部文化財課勤務主査

縄文人の青函交流

村越 潔

序言

晴れた日に下北半島突端の大間崎に立つと函館山が指呼の間に見え、逆に函館山山頂からは、津軽・下北半島はもとより、遠く津軽内陸部の岩木山を望見することも出来る。恐らく縄文人は、津軽海峡を隔てた両突端に立って、対岸の世界に憧憬の念を抱いたことであろう。

本州と北海道を引き離している津軽海峡は、昔から海の難所として知られ、江戸時代などでも巡察使の渡海は命懸けであったし、大型船の洞爺丸（国鉄青函連絡船4,337t）も、たとえ台風の襲来とは言え、沈没による多数の犠牲者を出すなど、南北交流の障害となっていた事実は否定出来ない。しかし縄文時代には、われわれが想像する以上に、人々の交流がなされていたのである。

津軽海峡

青函海底トンネルの建設工事をモデルに製作された『海峡』と言う映画があった。「昔マンモスが渡ったこの海峡に、今人の歩いて渡れる道をつけたい。」をキャッチフレーズに、高倉健・吉永小百合・三浦友和・大谷直子の面々が、スクリーン上で活躍し感激した思い出があるし、また石川さゆりが歌う「津軽海峡冬景色」なども、この津軽海峡を有名にした。

ところでこの海峡は、大間崎（本州）と汐首岬（北海道）の間が18.8km、大間崎から函

館山（大鼻岬）まで27.7km、竜飛岬（本州）と白神岬（北海道）の間は19.4kmあり、その間を西の日本海から、東へ向って暖かい対馬海流が流入し、下北半島の尻屋崎東方で、北海道の太平洋側に沿って南下して来た、冷たい千島海流に合流すると言われており、海峡を流れる潮流（津軽暖流）は、平均時速約4～7kmの速度をもって流れているが、その流れは北海道側よりも本州側の方が速く、竜飛岬沖で約2～10km、大間崎沖では約2～13km



津軽海峡から見た北海道函館山

に達すると言う。

このような難所である津軽海峡を、縄文人に想いを込めて昭和45年（1970）7月から、手製の筏（キナンボ号—アイヌ語で言う魚のマンボウのこと）を用いて渡海に挑戦し、失敗を重ねながら翌年の8月10日に至り、津軽半島の権現崎（青森県北津軽郡小泊村）を舟出して、渡島半島の松前郡福島町岩部海岸まで約13時間を要し成功したのである。その後

もカヌーによる渡海や泳いでの横断など、人間の力の可能性と限界に挑戦を試み、冒険心を燃やす魅力をこの海峡が秘めており、縄文人から受け継いだ血の騒ぎが、挑戦者の心情を揺さぶるのかも知れない。

今日この津軽海峡は、現代科学の粋を尽して完成した青函海底トンネル（青森県東津軽郡今別町浜名～北海道上磯郡知内町湯ノ里間53.85km）によって、彼我の交流は安全にかつ駿足になされている。

アジア大陸の東縁に弓状をなして連なる日本列島は、北から宗谷（La Perouse）・津軽・対馬と朝鮮などの海峡によって分離され、またこれらの海峡により日本海・オホーツク海・太平洋と繋がっている。ところが、これら三海峡は同時に形成されたものではなく、地質学分野の見解では、地史で言う第四紀更新世（洪積世とも言われる）後期の第三間氷期（Riss～Würm間氷期）、ないしは最終氷期（Würm間氷期）の第二亜氷期以降に、津軽と対馬ならびに朝鮮海峡が成立し、北アジアに近接する間宮（Tatar）海峡と宗谷海峡は遅れて第四紀完新世（沖積世とも言う）初期のころ、つまり氷河時代が終って後氷期に入ってから成立したとされ、そのため北方で活動していた巨象（マンモス）は、津軽海峡を渡ることが出来ずに北海道でストップし、それに代わって海峡が成立する以前に本州と北海道との陸橋を往来していた、ナウマンゾウの化石骨が両地域において発見されている。

津軽海峡の成立により、北海道と本州において、動物などの棲息に種類の相違が見られるようになった。たとえばヒグマ・ナキウサギ・クロテンなどは本州に棲息が見られず、逆にモグラ・ムササビ・カモシカ・ブッポウソウなどは、海峡を越えた北には棲息しないと言われ、これら動物群の差異を基に、イギ

リス人で日本の地震学の父とも言われるJ.ミルンにより、その相違の現象を発見したT.W.ブラキストンの名をとって、北アジアの動物分布に関する境界「ブラキストン線」と呼ばれている。

文化交流 (1)

旧石器時代 地質学で言う第四紀更新世の時代は別名氷河時代とも言われ、地球上を覆っている氷床が現在よりも広範囲に、かつ厚く堆積していたと考えられている。その現象は寒冷のため、多量の水分が凝固し氷となったもので、水分の供給源は恐らく海洋であったろう。当然のことながら氷床の拡大によって海水面が低下し、最終氷期の第二亜氷期（W2）には100～130mも低下したとされている。したがってこのような見解を基に考察すると、

最終氷期の海面低下量諸説

年度	計算者	低下量 (単位m)	年度	計算者	低下量 (単位m)
1928	Antevs	90	1962	Donn et al.	123
1934	Daly	85	1966	戸谷	135
1947	Flint	102	1971	Flint	132

(成瀬 洋『第四紀』1982年 p.56より引用)

津軽海峡は、渡島半島の白神岬と津軽半島の竜飛岬との間にあると言われる、松前・田山・須田の海釜（狭い範囲で深くなっている海底域）を避けて通れば、歩いて渡ることも可能であったろう。その後は亜間氷期と亜氷期が交互に到来するが、100mを越えるほど海水面の低下をもたらす寒冷気候は襲来しなかったようであり、先述のブラキストン線で示した動物の渡海は不可能になるのである。

われわれの祖先は、このような自然の試練を乗り越えながら海峡を往来していたと思われる。たとえば後期旧石器に属する石刃・荒

屋型彫刻刀、湧別技法ないしはその技法の範囲に含まれる、大平山元Ⅱ遺跡の尖頭器・彫器を製作する技法（大平山元技法）と、立川型有舌尖頭器などは、北海道および東北地方から中部地方にかけて広い分布を見るが、杉久保型ナイフは、本州の中部地方から東北地方に広がりを示しながら、北海道には見られないと言われており、旧石器時代における交流は、海峡の成立後には円滑でなかったようである。

文化交流 (2)

縄文時代 長く、そして寒冷であった氷河時代が過ぎ、やがて人類は後氷期を迎えるに至り、地質学で言う第四紀完新世なる時代が到来したのである。今まで居座っていた氷床は後退し、気温は次第に温暖化の方向へと進み、それにしたがって人類の活動も活発になった。日本列島ではこの時代を、文化史の上で縄文時代と呼称している。

ところでこの縄文時代は六期に分類され、古い方から草創期→早期→前期→中期→後期→晩期のように呼ばれ、年代は『考古学の世界』を参考にすると、

草創期	12000年前～10000年前
早期	10000年前～6000年前
前期	6000年前～5000年前
中期	5000年前～4000年前
後期	4000年前～3000年前
晩期	3000年前～2400年前 2300年前

のように考えられている。近ごろ話題になっている青森市の三内丸山遺跡を、縄文前期中葉（5500年前）から縄文中期末（4000年前）に至る1500年間の生活の跡と言うのは、この分類と年代に基づいている。

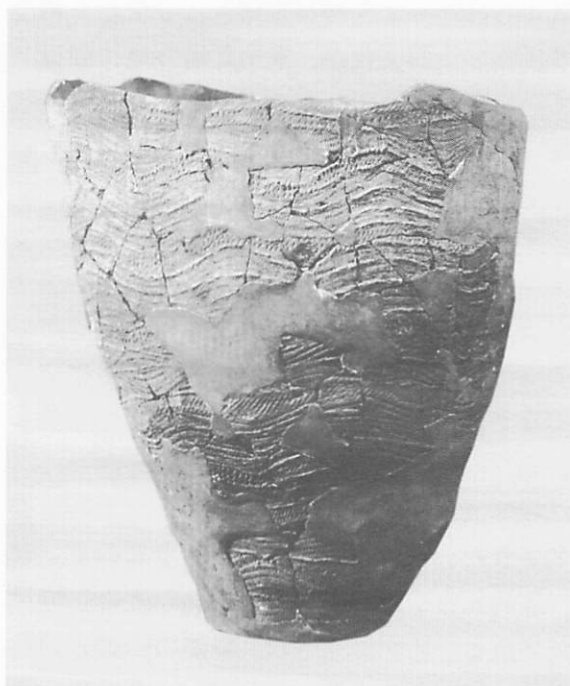
草創期 縄文草創期に属する遺物は、本州側で昭和50年（1975）11月に発掘調査された、津軽半島中央部の蟹田町大平山元Ⅰ遺跡から、刃部を研磨した局部磨製石斧とともに出土した無文土器の発見を最初として、その後は東北縦貫高速自動車道八戸線の建設工事に伴い、昭和56年（1981）に緊急調査が行われた八戸市鴨平(2)遺跡より爪形文土器が出土し、さらに昭和62年（1987）には、石油備蓄基地に関連の調査によって、上北郡六ヶ所村表館(1)遺跡から隆起線文土器が発見されるなど、縄文草創期の土器文化が、本州北端の地に到達していた事実を証明したのである。ただし当該期の土器文化は、現在のところ海を越えてはいないようである。

早期 縄文早期に入ると、海を越えた交流は次第に活発となり、とくに二枚貝（アナダラ属）の腹縁を利用し施文された土器が、北海道と本州の両地域で出土し、頻繁に交流のなされた状況が捉えられている。なかでも函館空港の拡張に関連した中野A遺跡では、江坂輝彌（現慶應大学名誉教授）によって命名された、物見台式土器（下北半島の東通村尻屋物見台遺跡出土土器を標式とする）期の住居跡と土壙が発見され、隣接の中野B遺跡では、住吉町式土器（函館市住吉町遺跡出土の土器を標式とする）期の住居跡ならびに土壙（フラスコ状ピットと言われる）も多数検出されており、本州側でも、たとえば八戸市河原木の売場遺跡において、住吉町式ないしはその仲間が出土し、出土した層位から物見台式（千歳式）土器の前段階に位置すると考えられている。

近年ムシリ遺跡出土の土器について詳細な検討が江坂輝彌と中村五郎によってなされ、連名で論考が発表されている。その論考のなかに、先述の中野A遺跡から、沈線文を主体

としたムシリ1式土器（下北郡東通村尻屋ムシリ遺跡出土の土器を標式とする）が出土していると言われる。

このような本州側からの伝播に対し、北海道で生まれ育った東釧路Ⅳ式ならびに中茶路式土器などが、海を越えてもたらされ、太平洋側の東通村前坂下(13)および六ヶ所村表館(1)遺跡において発見されている。北海道と本州とは、少なくとも縄文早期の中葉から後葉にかけて、交流の頻度は高かったと言えよう。



本州出土の北海道系土器（中茶路式）
表館(1)遺跡出土

前期 縄文前期は、さきの早期を凌駕するほどの交流がなされている。前半期には北海道において、斜縄文と竹管押切りの施された、尖底深鉢形を呈する春日町式土器が現われ、渡島半島南部で繁栄を見せるが、この土器に類似するものは、東北北部の早稲田第6類土器（三沢市早稲田貝塚出土の土器を標式とし、第1類から第6類まで形式設定がなされている）であり、恐らく両形式土器は接触

し交流が行われていたものと考えられる。



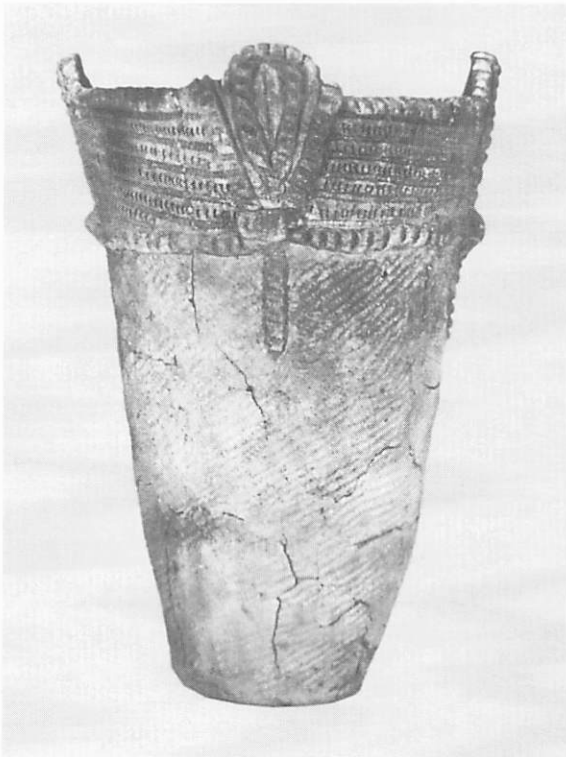
縄文前期円筒下層 a 式土器
石神遺跡出土

前期の中葉になると、東北北部では円筒土器下層式（略して円筒下層式）と言われる、胎土にイネ科植物の繊維を加え、言わばバケツを長くしたような形状をもつ土器が出現した。この土器の名称は、昭和初期に長谷部言人と山内清男（当時、東北大学に在籍）によって命名・分類され、現在でも当初の a・b・c・d 類（今では類よりも式で呼ぶ場合が多い）なる形式名が用いられており、一方では形式の細分化も試みられ、とくに d 式土器は二分されて、d 1 式ならびに d 2 式と呼ばれている。

北海道では江差町楳川遺跡の楳川式土器（円筒下層 a 式に対比）をはじめ、函館市西桔梗町のサイベ沢遺跡出土土器を標式として設定された、サイベ沢Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式を前期に組み入れ、円筒下層式の各形式土器と対比させている。

ところでこの円筒下層式土器は、想像以上の広い範囲に分布を見せ、北は北海道の石狩川河口にある石狩町上花畔1遺跡を北限とし、南は岩手県の太平洋に面する田野畑村を起点に西へ向い、盛岡市を経て奥羽山脈を横断し、秋田県の八郎潟周辺まで広がっており、さらに一部は、遠く富山県氷見市の朝日貝塚や、能登半島の石川県能都町に所在する真脇遺跡で、円筒下層d1式土器の仲間が出土している。

中期 縄文中期の東北北部は、円筒土器上層式（略して円筒上層式）土器が盛んに製作使用された時代である。土器の形態は、基本的にさきの下層式と同様であるが、口縁が波状ないし山形を呈し、口頸部に粘土の紐を貼り付けて、器面の装飾を豪華に作り上げて



縄文中期円筒上層a式土器
石神遺跡出土

いる。胎土に植物繊維の含入はない。この土

器の分布は広く、北は円筒下層式土器が達した石狩川河口付近を越えて、遠く礼文島（上泊3遺跡）を北限とし、一方では日高山脈西側の海岸地帯を南下して「えりも町」に及んでおり、南は岩手県の北上市から奥羽山脈を越えて、秋田県の横手市にまで広がりを見せている。なお円筒上層式ないしは同じ系統の仲間に含まれるような土器は、北海道旭川市の嵐山ならびに神居古潭8遺跡などに見られると言われ、南は日本海に浮ぶ山形県酒田市沖の、飛島にある葡萄崎遺跡が南限のようである。

土器の器面に豪華な装飾を巡らし、繁栄を誇った円筒上層式土器も、中期後半になると、東北南部で大きな力をはぐくんでいた大木式土器の北上を許し、とくに円筒上層d式土器を境に、器面の粘土紐装飾は姿を消し、代わって沈線文が、主体文様の地位を占める円筒上層e式土器を出現させ、その後に至って円筒上層式土器は、大木式土器のなかに吸収されてしまうのである。

北の北海道は、さきの前期に引き続いてサイベ沢出土の土器をV式からVII式まで細分し、また中期初頭の位置に恵山町日ノ浜遺跡出土の古武井式土器を充て、東北北部の円筒上層式土器との編年対比を行い、渡島半島の日本海側では、古武井式（本州の円筒上層a式）に対比可能な土器に勝山館Ⅲ式を、サイベ沢V式（円筒上層b式）に対比される土器として、十兵衛沢Ⅱ式を充てている。なお渡島半島では、円筒上層式系統の土器に続いて、東北北部と同様に大木8b式系統の土器が現われ、大木式の影響を少なくとも受けているようである。

後期 縄文後期は、関東地方の称名寺式（神奈川県横浜市金沢区の称名寺貝塚出土土器を標式とする）に続く堀之内式（千葉県市

川市堀之内貝塚出土土器を標式とする)、ならびに加曾利B式(千葉県千葉市若葉区に加曾利貝塚B地点出土土器を標式とする)系統の土器が北上して東北南部に入り、門前式(岩手県陸前高田市の門前貝塚出土土器を標式とする)・宮戸各式(宮城県桃生郡鳴瀬町宮戸里浜貝塚出土土器を標式とする)の土器を成立させ、さらに東北北部へと進出して、後期初頭に位置付けられる牛ヶ沢式土器(八戸市根城の牛ヶ沢(3)遺跡出土土器を標式とする)をはじめ、岩木山北東麓にある弘前市十腰内遺跡出土の土器を標式として設定された、十腰内I式からVI式に至る土器文化を誕生させた。

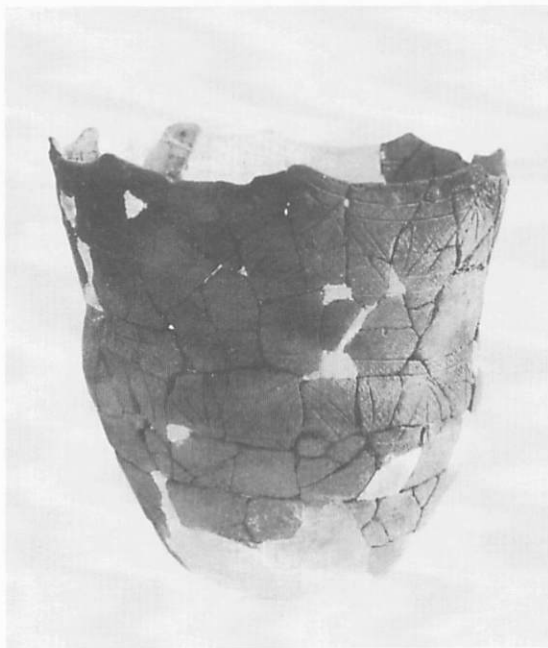
本州のこのような土器編年と対比される北海道の状況は、非学浅才のため明確に述べることは出来ないが、道南部において十腰内I式土器の影響を受けたものが知内町の湧元遺跡(湧元式)ならびに、噴火湾の北側に面す

る虻田町の入江貝塚(入江式)などの土器に見られ、これらに後続すると思われる小樽市の鮎澗遺跡出土土器を標式として命名された、鮎澗式には十腰内III式土器の姿を読み取ることが出来る。このような本州との深い繋がりをもつ土器に対し、北海道で育った突瘤を有する堂林式土器が、逆に海を越えて、津軽半島の陸奥湾に面する平館村尻高(4)遺跡や、津軽地方内陸部の平賀町小金森遺跡・下北半島突端の大間町ドウマンチャ貝塚および、むつ市の大湊近川遺跡などから出土している。

縄文後期は東北北部において、大小の河原石や土器(甕棺)を用いて造られた墳墓の多く見られる時代でもある。一般に縄文時代の墳墓は、各期を通じて、地表を長楕円形(小判形)に掘り、遺体の多くは手足を折り曲げた、言わば屈葬の状態で埋葬された事例が多く、青森県では遺体の残っていた例として、三戸町の泉山遺跡(中期)・十和田市明戸遺跡(晩期)・八戸市八幡遺跡(晩期)・同市是川中居遺跡をあげることが出来る。また物を貯蔵したと思われる、フラスコ状ピット(断面の形状が化学の実験で使うフラスコに類似しており、この名が用いられるようになった。袋状土墳とも言われる)を転用した土墳墓も、前期の時代に多く見られるようである。

これら一般的な土墳墓に対し、板状を呈する石や、河原石を用いて箱形の施設を造り、その内部に遺体を埋葬した石棺墓と言われるもの、大型の土器(壺の形態をなすもの、大型の深鉢がある)を利用した甕棺と呼ばれる土器棺などがあり、さらに多数の石を用いて造成した配石遺構や同じく広く円状に並べた環状列石(ストーン・サークルとも呼ばれる)も発見されている。

ところでこのような墳墓のなかでも、北海道との関連を有すると考えられる遺構は、土



本州出土の北海道系土器(堂林式)
大湊近川遺跡出土

墳墓を除くと、石を利用した積石墓または積石石棺墓と環状列石であろうか。前者の積石墓などは、北海道において多数発見され、日高の静内町御殿山遺跡はその代表的なものであろう。本州では青森市久栗坂の山野峠で昭和8年(1933)に発見され、さらに昭和42年(1967)と同57年に調査が行われて、石棺墓の上に沢山の石が、ケールンのように積まれている状態を確認している。また後者の環状列石は、本州側において国の史跡指定を受けた青森市の小牧野遺跡や三戸郡田子町の関遺跡、下北半島の東通村尻屋にある札地遺跡などのほか、南の岩手県では二戸市の荒谷遺跡をはじめ、時期は遡るが、中期には北上市の樺山遺跡。秋田県は国の特別史跡となっている、鹿角市の大湯遺跡・鷹巣町の伊勢堂岱遺跡などをあげることが出来よう。北海道に渡ると、著名な同類遺跡として深川市の音江・小樽市の忍路・余市町の西崎山遺跡などがあり、いずれも付随する土壌内から、副葬品と思われる遺物が発見され、共同墓地的な性格が強い。本州では小牧野・樺山・大湯などで甕棺を伴っている。

晩 期 縄文時代の最後を飾る晩期は、俗に言う亀ヶ岡土器文化(略して亀ヶ岡文化)の繁栄した時代である。

この亀ヶ岡なる名は、青森県西津軽郡木造町所在の亀ヶ岡遺跡に因んで命名されたもので、遺跡の発見が江戸時代に遡り、しかも地元民によって掘り出された遺物が、国内はもとより、海外にまで流出して有名になった。しかしながら考古学の上では、遺跡の発見が古いにもかかわらず、遺物と出土層位とを詳細に分析し、新古を決定する研究方法論を欠いていた結果、岩手県大船渡市赤崎町に所在する大洞貝塚出土の土器を、層位学的ならびに形式学的に分類した山内清男の6形式設定

(大洞B式→大洞BC式→大洞C1式→大洞C2式→大洞A式→大洞A'式)が評価され、亀ヶ岡の名は、東北地方の縄文晩期に栄えた文化の総称として使われているに過ぎない。

仮に総称あるいは俗称であるにしても、人々に親しまれ呼称されている亀ヶ岡または亀ヶ岡式なる土器は、津軽海峡を越えて北海道に伝播し、南は東北地方一帯に広がりを見せ、さらに西進を続けて、遠く近畿地方の神戸市灘区にある篠原仲町(篠原B)遺跡をはじめ、和歌山県の日高川流域などにも達している。

ところで海峡を越えて北へ向った亀ヶ岡土器は、北海道開拓記念館の野村崇によると、第Ⅰ期とされる大洞B式・同BC式土器は渡島半島南部に、第Ⅱ期の大洞C1式土器は、北限を余市町の大谷地貝塚、東限は夕張郡由仁町の東三川遺跡であり、Ⅲ期の大洞C2式土器は、北限が石狩町のシビシウス遺跡から余市町の大川遺跡、第Ⅳ期の日ノ浜式と言われる大洞A式土器は、北限を道北端の稚内市大岬にあるオニキリベツ遺跡、東限は釧路市の緑ヶ岡遺跡であるとされ、晩期最終末の大洞A'式土器については、実体が不明で把握されていないと言われていた。

しかしその後になって道内の調査研究が進み、第Ⅰ期の土器は渡島半島を北上して、積丹半島の基部に当る余市町大川ならびに入舟遺跡に達し、宇田川洋によると、一部は遠くオホーツク海に面する湧別町芭露の二軒橋遺跡から、斜里町朱円のウナベツ川遺跡に達していると言われ、さらに南へ下って十勝の浦幌町下浦幌にある、若月および共栄Bなどの遺跡でも見られるらしい。

次いで第Ⅱ期になると、分布の範囲は逆に大きく縮小し、大半は石狩勇払低地帯を越えるほどの力を発揮せず、その低地帯を越えたのは1遺跡(勇払郡厚真町の共和遺跡)のみの

ようである。

第Ⅲ期は渡島半島に分布が集中し、一部は噴火湾に沿って東進して、白老町の社台1遺跡にその証拠が印されている。一方、日本海側では野村崇の説のごとく、石狩町シビシウスならびに余市の大川遺跡あたりが北限に当るようである。

第Ⅳ期もさきの野村が示している見解を逸脱するほどではないが、礼文島の上泊3遺跡より出土したⅡ群A類土器のなかに、変形工字文を有する深鉢があり、したがって亀ヶ岡土器文化の余波は、大岬のオニキリベツ遺跡と同様に、北海道の最北端にまで達していることは間違いない。

このように縄文晩期の土器文化は、海を越えて時間の経過とともに波紋のごとき広がりを見せ、北海道の奥地にまで達している。

一方、亀ヶ岡文化の北上に対し、反対に北海道の土器が本州にも伝播を見せている。たとえば本州の大洞B式土器に相当するとされる上ノ国式類似の土器が、下北半島突端のドウマンチャ貝塚ならびに、亀ヶ岡の本拠地でも出土し、日ノ浜式土器は、津軽半島の突端に近い三厩村宇鉄・十三湖北岸にある市浦村の五月女産・陸奥湾に臨む平館村の今津などの諸遺跡でも発見されており、活発な交流がなされていた事実を物語っている。

文化交流 (3)

土器以外の遺物 津軽海峡を挟んだ南北の交流は、土器以外の用具類にも現れている。たとえば縄文早期後半期に本州側で出現した漁具の回転離頭鉈は、次の前期になると海を越えて、函館市のサイベ沢や、噴火湾北岸の伊達市北黄金貝塚で出土し、晩期には北海道において、日本海と津軽海峡沿岸で見られ、本州では日本海に近い亀ヶ岡と、陸奥湾の青

森市大浦貝塚で発見されているようである。

生活必需品であった石器のなかで、剥離面が鋭利な切り口をもつ黒曜石は、北海道産のものが多量に本州側へもたらされている。出土当該遺物のなかには優品もあり、珍重された移入品であったろう。主に下北ならびに津軽半島の沿岸遺跡から出土し、一部は十和田市などの内陸部にまで伝播している。

青森県にも黒曜石の産出地（日本海側では木造町の出来島海岸・岩木山北麓の鯨ヶ沢町鳴沢川河床・深浦町）はあるが、気泡が多く、大半は利用出来ない状態であり、そのため剥片石器のほとんどは、津軽半島の脊梁山地に多い珪質頁岩が使われている。なお北海道産の黒曜石は、北へ向って分布の広がりを見せ、ラ・ペルーズ（宗谷）海峡を越えてサハリン（樺太）を通り、さらにタタール（間宮）海峡を経て、ロシアの沿海州にまで達していると言われる。

縄文人も現代人と同様に、美しい石を利用して身を飾り、美しさを誇示していたことであろう。瑪瑙（玉髓）と言われる乳白色ないしは、だいたい色を呈する石の出土例も多く、このような産地の限られている石の出土は、交易を物語る証拠の品として扱われることが多い。その代表格は翡翠であろう。産地は現在のところ、長野県の安曇野地方から北流し、新潟県西部の糸魚川市で日本海へ注ぐ、姫川の支流である小滝川と、同じく新潟県の西端にある青海町の橋立とされ、これらの原石の産地はもとより、川に転石となっている石を利用して身を飾ったものであろう。青森から糸魚川までは、JRの営業距離で617.4km、青海まで624kmあり、いかに縄文人が健脚であるとしても、採石に行つて重い原石を運搬することは考えられず、丸木舟あるいは筏を使用したとしても遠過ぎると思われ、恐らく物々

交換と言う手段で入手したものであろう。このような翡翠を入手加工し、装身具に利用するのは縄文中期に入ってからであり、青森市の三内丸山遺跡では、盛土遺構（無機遺物の廃棄場＝祭祀場と考えられる）から出土しており、なかには未製品も見られ、したがって彼等は製品を入手したのみではなく、原石を入手し、三内丸山の地で加工し細工を施したのもあったろう。研磨や穿孔など、加工の過程を示すものも出土している。

このほか接着剤に用いられた天然アスファルトをはじめ、本州でも南の地域に棲息するオオツタノハ（伊豆諸島の南部や、南西諸島以南に棲息）ならびに、イモガイ（房総半島以南に棲息）・ペンケイガイの北海道への伝播も見られる。なおこの類の遺物について、去る9月23日から本日（10月15日）まで、八戸市博物館で開催されている「新発見考古速報展」において、虻田町入江貝塚より出土したオオツタノハの腕輪と、イモガイ製の玉が展示されており、今後ますますこのような遺物の発見が増加するものと考ええる。

まとめ

以上のごとく、津軽海峡を仲立ちにした北海道と本州の交流について、縄文時代に絞って概観を試みた。多くの参集された方々は、本州を主体とした話に失望されたことと思う。なお今回発表を省略した諸遺物のなかには、木古内町札苅遺跡出土の石刀にきわめて類似のものが、海峡を隔てた津軽半島の三厩村宇鉄遺跡でも発見され、また土製の装身具であり、瑪瑙ならびに碧玉などの小石を象嵌した遺物も、海峡を挟んで出土するなど、海を越えた交流は、難所をものともせず頻繁に行われていたようであり、北と南が互いに刺激し合いながら縄文文化を支え、そして発展させ

て行ったものと思う。

追記 本稿は1995年10月15日に、函館ハーバービューホテルで開催された、シンポジウム『縄文人の青函交流』における基調講演の内容である。末尾の引用・参考文献については新たに発表されたものも加えている。

（青森大学教授）

引用・参考文献

- 湊正雄・井尻正二 『日本列島』 岩波新書 1958年
- 亀井節夫 『日本に象がいたころ』 岩波新書 1967年
- 成瀬 洋 『第四紀』 岩波書店 1982年
- 星野通平・小林高寿 「津軽海峡」 『世界大百科事典』 19 1959年
- 青森県立郷土館 『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 1979年、同 『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 1980年、同 『大平山元Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 1981年
- 芹澤長介編 『古代史発掘 (1)最古の狩人たち』 1974年
- 森浩一・佐原眞監修 『考古学の世界 ①北海道・東北』 ぎょうせい 1993年
- 青森県教育委員会 『表館(1)遺跡発掘調査報告書 Ⅲ』 県報 120 1989年
- 同 『鴨平(2)遺跡発掘調査報告書』 県報 73 1983年
- 北海道埋蔵文化財センター 「中野B遺跡の概要」 『現地説明会資料』 1995年
- 越田賢一郎 「中野B遺跡の意味するもの」 『朝日カルチャーセンター資料』 1996年
- 江坂輝彌・中村五郎 「青森県ムシリ遺跡について」 『北海道考古学』 31 1995年
- 青森県教育委員会 「前坂下(13)」 『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財調査報

告書』75 1984年

長谷部言人 「円筒土器文化」 『人類学雑誌』42-1 1927年

山内清男 「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1-2 1929年

野村崇・菊池俊彦編 『北海道考古学講座』1980年

石狩町教育委員会 『石狩町上花畔地区宅地開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』1992年

林 謙作 「円筒土器」 『世界考古学事典』上 1979年

能都町教育委員会ほか 『石川県能都町真脇遺跡』1986年

北海道埋蔵文化財センター 『礼文島幌泊段丘の遺跡群（東上泊・上泊3・上泊4遺跡）一
道々礼文島線特改1種工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告一
道調査報告書』19 1985年

柏書房 『日本歴史地図 原始・古代編 上』1982年

今井富士雄・磯崎正彦 「十腰内遺跡」『岩木山』1966年

青森県教育委員会 「尻高4」 『一般国道280号今津バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 県報 89 1985年

平賀町教育委員会 『青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書』 1974年

江坂輝彌ほか 「大間町ドウマンチャ貝塚」『下北』1967年

青森県教育委員会 『大湊近川遺跡発掘調査報告書』 県報 104 1987年

青森県教育委員会 『泉山遺跡Ⅲ』 県報 190 1996年

村越 潔 「北東北の葬制」 『よねしろ考古』3 1987年

村越 潔 「青森県の配石遺構」 『小牧野遺跡発掘調査報告書』 所収 1996年

秋田県埋蔵文化財センター 『伊勢堂岱遺跡現地説明会資料』 1996年

清水潤三編 『亀ヶ岡遺跡』 三田史学会 1959年

青森県立郷土館 『亀ヶ岡石器時代遺跡』1984年

野村 崇 「いわゆる亀ヶ岡式土器の北方への伝播について」 『北海道開拓記念館研究年報』 3 1975年

野村 崇 『日本の古代遺跡 40 北海道Ⅰ』1988年

余市町教育委員会 『1994年度大川遺跡発掘調査概報』 1995年

余市町教育委員会 『1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報』 1996年

宇田川 洋 「大洞式 幣舞式・緑ヶ岡式土器出土・遺跡」 『考古遺跡遺物地名表 2 原始・古代』（所収） 柏書房 1983年

北海道埋蔵文化財センター 『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』 1981年

市浦村教育委員会 『市浦村五月女菰遺跡』1983年

青森県教育委員会 『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』 県報 95 1986年

福田友之 「縄文時代の物と人の移動」『北日本の考古学』 1994年

三厩村教育委員会 『宇鉄遺跡』 1996年

「箱館戦争関係墓碑」調査について

－ワークショップ「箱館戦争の史跡を探る」のまとめ－

保 科 智 治

・調査の概要

本報告は、平成6・7年度の2年間にわたっておこなった市民参加のワークショップ（通年講座）で得られた箱館戦争に関する墓石調査の結果報告である。

平成6年度は、中野宏一・山本喜利・山本寛の3氏が参加し、「官軍海軍墓地」（船見町）・「護国神社」（青柳町）・「大円寺」①（神山）の3箇所の調査をおこなった。

平成7年度は、五十嵐和子・梅田慶・加藤成一・鈴木孝夫・鈴木悦子・中野宏一・榎山チエ・村端京子の8氏が参加し、「実行寺」（船見町）・「大円寺」②・「護国神社」の調査をおこなった。

調査方法は、調査カードに資料名・所在地・状態・スケッチ・寸法等を記入していくものとした。

2年間にわたる調査の結果、98点にのぼる「箱館戦争関係墓碑」のカードを作成することができた。

・調査結果

従来まとまった形での「箱館戦争関係墓碑」の調査はおこなわれておらず、2年間の調査により市内の「箱館戦争関係墓碑」の全体像が多少なりとも浮かび上がってきたものと思う。この調査によって現段階における墓碑の状態が把握され、一部の墓碑については磨滅等の進行により文字の判読が不可能な状態になっていることも分かった。今後、磨滅等が

進行した際に今回おこなった調査結果が、復元等の際の一助になると思われる。

次に各箇所の調査結果の概要について触れておきたい。

*護国神社

ここには59基の墓碑があり、新政府軍各藩の戦死者のものである。松前神止山・江差松ノ岱の招魂場と同様、函館招魂場から移されたものである。

各藩の墓碑の数は、福山藩16基（明治元年戦死者分13基・明治2年戦死者分3基）、弘前藩18基（明治元年戦死者分4基・明治2年戦死者分14基）、大野藩12基（明治元年戦死者分2基・明治2年戦死者分10基）、御親兵6基（明治2年）、津藩1基（明治2年）、松前藩1基（明治2年）、鹿児島藩1基（明治2年5名合葬）、飛龍水夫1基（明治2年）、不明1基、海軍戦死者1基（官軍海軍墓地のものとはほぼ同内容）、となっている。

*官軍海軍墓地

ここには5基の墓碑があり、海戦により戦死した人物のものである。「己巳役海軍戦死碑」には甲鉄5名・朝陽61名・春日5名・飛龍1名の合計72名の戦死者が刻まれている。「函館府在住隊墓碑」には朝陽に乗り組んでいた函館府在住隊9名の名前が刻まれている。その他春日乗組員3名の墓碑が存在する。

*実行寺

ここには7基の墓碑があり、1基を除くと旧幕府脱走軍のものと思われる。旧幕府脱走

軍のものと思われる墓碑6基のうち、明治元年戦死者の墓碑が4基、明治2年戦死者の墓碑が2基あるが、明治2年のものについては当時の状況から後年建てられたものと思われる。旧幕府脱走軍の墓碑は道南には他に数基しか存在しない。

*大円寺

大円寺において調査をおこなった墓碑は27基であるが、「箱館戦争関係墓碑」とは関係のないものも含まれる。表では「大円寺①」・「大円寺②」とわけてある。「大円寺①」は「旧官修墓地」と書かれた木柱のところにある3基である。「大円寺②」は「箱館奉行役宅墓所」と書かれた木柱のところにある24基である。「大円寺①」の3基は明治元年に戦死した新政府軍兵士のものである。「大円寺②」は22基が箱館奉行役関係者のものと思われるが、2基が箱館戦争戦死者関係のものである。1基は旧幕府脱走軍のもの、もう1基は函館府在住隊のものである。

・文献調査

墓碑調査をおこなった後に、その史料적裏付けと「箱館戦争」を刊本からではなく、史料から調べることを目的として文献調査を試みた。

平成6年度は、市立函館図書館所蔵の箱館戦争関係史料を調査した。調査方法は墓碑調査と同様カードに資料名・内容・作成者・作成年代等を記入していくものとした。

しかし、図書館を利用することがはじめてであったり、郷土資料室を利用するのがはじめてであったこと、普段みることのなくずし字などのため墓碑調査のように進まなかった。そのため、文献調査についてはとりあえず史料に触れることに主眼をおき、内容の把握・カード作成はおこなわなかった。

平成7年度は、平成6年度の反省をふまえて史料調査をおこなう前に、箱館戦争全体の流れを知るためにも史料を読むことをおこなった。史料は字体もさほどくずれていない『麦叢録』を使用した。当初の目的は『麦叢録』を書き下し活字化する予定であったが、担当者の不手際により一大鳥圭介『幕末実戦史』（新人物往来社 1978）に『麦叢録』が活字化されていることを途中で気づき、書き下したものと活字化されたものを読み比べていくという内容に変更した。

幸いにも実際に史料を読んだことによって、概説だけでは理解できなかった部分がかかり把握できるようになったと同時に、さらに細かい部分についての関心を持ち、自ら図書館に足を運んで調べようという参加者もでてきた。ワークショップのひとつの目的である自発的活動の育成という点では多少ではあるが効果があったものと思う。

・2年間のワークショップ

2年間のワークショップを通じて市内に残された「箱館戦争関係墓碑」の記録を残せたことは大きな成果であったと思う。

当初参加者は、1年間をかけて自分たちで調査をすることを意識していなかったことと、このような調査を経験したことがなかったことから戸惑い気味ではあったが、調査を進めていくうちに墓碑調査のカード作成はある程度自分自身でおこなえるようになった。

しかし、2年間を通して参加した人が1名ということもあって、ワークショップの目標である参加者自身が何をどのように調べ、どういう形でまとめていくかということには到達できなかった。担当者の力不足を痛感する点である。今後は、参加者がいかにこの目標に到達できるかを検討課題としたい。

・参考文献

- 神山 茂「箱館戦争（戊辰己巳役）幕軍陣
歿者氏名考」（一）～（十）
神山 茂「明治戊辰己巳役官軍殉難者考」
脇 哲『埋もれていた箱館戦争』（みや
ま書房 1981）
永田青雲『道南の碑－北海道道南における
碑碣・墓銘の研究』（幻洋社 19
96）
「函館護国神社史」（九）（『函館護国神
社々報』第10号 1964）
『函館市史』通説編第二卷（函館市 1990）
『江差町史』第三卷資料三（江差町 1979）
『松前町史』通説編第二卷（松前町 1993）

調査および本報告をまとめるにあたり、下記
の機関および方々にご協力・ご教示をいただい
た。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

（敬称略・順不同）

- ・護国神社
- ・実行寺
- ・大円寺
- ・函館市史編さん室 紺野哲也
- ・大野町社会教育課 三上敏一
- ・上磯町社会教育課 藤井利明
- ・函館市北方民族資料館 野村祐一

*凡例－この一覧では墓碑に刻まれている文字
のみを掲載し、寸法等は省略した。

旧字・異体字は新字に統一した。なお、
「廿」「卅」についてはそのままとした。
備考欄のアルファベットと数字は概略
図における墓碑の位置を示す。他に墓
碑があるものはその所在地を示した。
なお、一覧にある場合は所在地と一覧
に付した番号を並記した。

No.61裏面については、永田青雲『道南
の碑』を参考とした。

□は文字数が分かる場合の不明文字を
表す。

[] は文字数が分からない場合の
不明文字を表す。

箱館戦争関係墓碑一覽

■護国神社

NO	埋 葬 者	記載事項（表）	記載事項（裏）	記載事項（右）	記載事項（左）	備 考
001	高島藏重	官軍伊州藩高島藏重墓			明治二年五月十一日戦於箱館 為病六月二日統年二十一才没	A-1
002	河合要之助	備後福山藩河合要之助則武招 魂処	明治元戊辰年十月廿四日於大 野村戦死行年廿五歳			A-2 大円寺73
003	内藤金三郎	備後福山藩内藤金三郎豊孚招 魂処			明治戊辰年十月廿四日於大野 村戦死行年十七才	A-3 大野町光明寺
004	松本喜多治	備後福山藩松本喜多治正招魂 処	明治元戊辰年十月廿四日於大 野村戦死行年十九歳			A-4 大野町南大野墓地
005	梅田小太郎	備後福山藩梅田小太郎詮謹招 魂処			明治戊辰年十月廿四日於大野 村戦死行年二十二才	A-5 大野町光明寺
006	柳沢友之助	備後福山藩柳沢友之助信之靈 神	明治元戊辰年十月廿四日於大 野村戦死行年二十歳			A-6 大野町光明寺
007	中村辰之助	備後福山藩中村辰之助則房靈 神			明治元戊辰年十月廿四日於大 野村戦死行年二十才	A-7
008	古川善左衛門	備後福山藩古川善左衛門定則 招魂処			明治元戊辰年十月廿四日於七 飯村戦死行年二十五才	A-8 七飯町峠下
009	中木初右衛門	備後福山藩中木初右衛門忠光 招魂処			明治二己巳年五月十七日於津 軽陣屋跡手負同月廿四日死	A-9
010	佐藤定次郎	備後福山藩佐藤定次郎信武靈 神	明治二己巳年五月十六日於津 軽陣屋戦死行年二十一歳			A-10

011	原好之助	備後福山藩原好之助好武之霊 神	明治己巳年五月十六日於津軽 陣屋跡被創同月廿六日卒同年 二十二歳			A-11
012	定吉	弘前葛原村定吉霊			明治二己巳五月三日於大川村 戦死	A-12 護国神社59
013	安之助	弘前駒越村安之助霊			明治二己巳四月廿四日於二股 戦死	A-13 護国神社59
014	長之助	弘前上田村長之助霊			明治戊辰十月廿三日於峠戦死	A-14 七飯町峠下
015	三浦銀弥	弘前三浦銀弥源実安霊魂			明治二己巳五月十一日於桔梗 野戦死行年十八才	A-15
016	石岡孫弥	弘前石岡孫弥藤原久法神霊		明治元年戊辰十月廿四日於七 重村戦死	行年廿二歳	A-16 七飯町宝琳寺
017	須藤万之助	弘前須藤万之助藤原直久霊魂		行年三十二歳	明治二己巳五月十一日於桔梗 野戦死	A-17 上磯町官修墳墓
018	金寅太郎	弘前金寅太郎藤原豊正神霊		明治元年戊辰十月廿三日於峠 下村戦死	行年廿七歳	A-18 七飯町峠下
019	坂本友弥	弘前坂本友弥藤原清通神霊		明治二己巳五月十一日於桔梗 野戦死	行年二十五歳	A-19 上磯町官修墳墓
020	高杉左膳	弘前高杉左膳源尚良神霊			明治二己巳五月十一日於桔梗野 戦死行年三十五才	A-20 上磯町官修墳墓
021	葛西文三郎	弘前葛西文三郎清生神霊		明治元年辰十月廿四日於七重 村戦死	行年二十四歳	A-21 七飯町宝琳寺
022	高杉権六郎	弘前高杉権六郎菅原正神霊		明治二己巳五月十一日於桔梗 野戦死	行年二十七歳	A-22 上磯町官修墳墓

023	工藤末吉	弘前工藤末吉藤原正一神靈		明治二己巳五月十一日於桔梗 野戰死	行年二十四歲	B-1
024	竹中範平	弘前竹中範平平久貞靈魂		明治二己巳五月十六日於千代 台戰死	行年三十歲	B-2
025	若林栄八	弘前若林栄八藤原直之靈魂		明治二己巳五月十一日於桔梗 野戰死	行年三十六歲	B-3 上磯町官修墳墓
026	斉藤東八	弘前斉藤東八菅原嘉治靈魂		行年四十七歲	明治二己巳五月十一日於桔梗 野死	B-4 上磯町官修墳墓
027	諏訪久吉	弘前諏訪久吉藤原貞真靈		明治二己巳五月十一日於桔梗 野戰死行年二十七歲		B-5 上磯町官修墳墓
028	佐藤純吉	弘前佐藤純吉斯文靈魂		明治二己巳五月十一日於桔梗 戰死	行年二十九歲	B-6 上磯町官修墳墓
029	中田勝之丞	弘前中田勝之丞藤原一中靈魂		行年三十五歲	明治二己巳五月十一日於桔梗 野戰死	B-7 上磯町官修墳墓
030	塩見謹弥	御親兵塩見謹弥藤原寅治墓		明治二己巳五月十六日於津輕 陣屋戰爭手負六月三日死	行年二十八歲	B-8
031	朝孝之輔	御親兵朝孝之輔源義久墓		明治二己巳五月十六日於元津 輕陣屋戰死二十八歲		B-9
032	宗田直次郎	御親兵宗田直次郎源正常墓		明治二己巳五月十六日於元津 輕陣屋戰死	行年二十四歲	B-10
033	藤村隼人	御親兵藤村隼人源正春墓		明治二己巳五月十六日於元津 輕陣屋戰爭手負六月十二日死	行年二十六歲	B-11
034	樽沢信之輔	御親兵樽沢信之輔平定往墓		明治二己巳五月十六日於元津 輕陣屋戰死	行年三十六歲	B-12
035	望月市太郎	御親兵望月市太郎源義高墓		明治二己巳五月十六日於元津 輕陣屋戰死	行年二十五歲	B-13

036	斉藤順三郎	西館府在住隊 斉藤順三郎		明治二年五月七日戦死		B-14
037	野崎栄次郎	官軍備州藩野崎栄次郎治幸之墓		明治二己巳年六月二十日	行年三十四歳	B-15
038	広木治左衛門	大野藩広木治左衛門正連靈魂		明治二己巳年四月十九日於矢不來戦死行年二十五歳		B-16
039	渡辺忠蔵	大野藩渡辺忠蔵忠則靈魂		明治二己巳年四月十三日於木古内戦死行年三十一才		B-17
040	金子庫次郎	大野藩金子庫次郎光義靈魂		明治元戊辰年十月廿四日於大野村戦死行年四十二才		B-18 大野町光明寺
041	吉田留五郎	大野藩吉田留五郎忠照靈魂		明治二己巳年四月廿九日矢不來負庇同五月廿二日津軽青森ニテ死行年十九才		B-19
042	高見政雄	大野藩高見政雄重定靈魂		明治二己巳年四月廿九日於矢不來戦死		C-1
043	岡穀	大野藩岡穀良資靈魂		明治二己巳年四月三日於木古内戦死行年二十六才		C-2
044	長瀬喜和馬	大野藩長瀬喜和馬且直靈魂		明治二己巳年四月廿九日於矢不來戦死行年二十才		C-3
045	寺田竹次郎	大野藩寺田竹次郎秀孝靈魂		明治二己巳年四月廿九日於矢不來戦死行年〇一才		C-4
046	三宅友七	大野藩三宅友七重貞靈魂		明治元戊辰年十月廿四日於大野村戦死行年十九才		C-5 大野町光明寺
047	和田実之助	大野藩和田実之助和義靈魂		明治二己巳年四月廿九日於矢不來戦死行年三十五才		C-6

048	山本太三郎	大野藩山本太三郎常信靈魂		明治二己巳年四月十三日於木古内戦死行年二十四才	C-7
049	寅吉	御艦飛龍丸水夫寅吉神靈	明治貳己巳年五月十一日於箱館港戦死行年二拾三歳	同年六月柳川藩由布一大神惟壽十時〇〇大神惟正建之	C-8 護国神社58 官軍海軍墓地60
050	真野録三	備後福山藩真野録三義寧招魂處	明治元戊辰年十月廿四日於大野村戦死行年二十一歳		C-9 大野町光明寺
051	千賀猪三郎	備後福山藩千賀猪三郎政道招魂處	明治元戊辰年十月廿四日於大野村戦死行年二十一歳		C-10 大野町南大野墓地
052	河村秀三郎	備後福山藩河村秀三郎奥光招魂處	明治元戊辰年十月廿四日於大野村戦死行年二十歳		C-11
053	橘高助五郎	備後福山藩橘高助五郎実光招魂處		明治元戊辰年十月廿四日於七重村戦死行年二十二歳	C-12 七飯町宝琳寺
054	赤松岩太郎	備後福山藩赤松岩太郎成盛招魂處	明治元戊辰年十月廿四日於七重村戦死行年二十歳		C-13 七飯町宝琳寺
055	丸内九蔵	備後福山藩丸内九蔵義国招魂處	明治元戊辰年十月廿四日於大野村戦死行年三十四歳		C-14 実行寺65
056	—	磨滅のため判読不可	磨滅のため判読不可	磨滅のため判読不可	C-15
057	森谷弥助	松前藩森谷弥助源義時神靈		明治二己巳八月七日戦傷死三十九年	D 松前町神止山招魂場
058	明治戊辰己巳海軍戦死者吊碑 甲鉄艦一下等士官小林五郎・整武隊中川豊・同溝口岩熊・水夫梅田梅之丞・鍛冶清次郎 朝陽艦一副長夏秋又之助・士官鬼塚麟之助・同野村金吉・同本庄豊馬・同牛島鹿之助・出納方士官乾監物・同山脇太三郎・士官山田為八・栗生馬場農次郎・同山口亀三郎・稽古人富永孫四郎・同牧野英太郎・同山下清左右衛門・同衣川口蔵・水夫頭恵山光治・火焚小頭天野徳蔵・一等水夫繁蔵・同岩吉・二等水夫由太郎・同卯之助・同須作・同文三郎・同豊吉・三等水夫庄三郎・同総市・同虎吉・同勝平・同善之助・同政八・同直吉・同善之助・同久五郎・同重吉・同刀三郎・一等火焚平治郎・同栄太郎・一等火焚重吉・同秀吉・鍛冶工兼同伊兵衛・二等火焚勘次郎・同末吉・同茂十郎・三等火焚茂七・同吉蔵・同幸次郎・同吉太郎・同艦乗組函館府在住隊伍長林六三郎・同川島由太郎・同菅原忠蔵・同統源三郎・同				E 官軍海軍墓地60 函館府在住隊一官軍海軍墓地61 春日艦和田彦兵衛一官軍海軍墓地62 飛龍艦水夫虎吉

	宮本長吉・同浜田作蔵・同藤井文吉・同小沢清太郎・同菊地重太郎 春日艦一測量方一等士官和田彦兵衛・兵卒前田嘉七郎・水夫三迫宗太郎・火焚村上貞助・水夫上野太郎 飛龍艦一水夫虎吉				一護国神社49
059	薩藩戦死者 佐藤安之助 花田定吉 田中泰蔵 恒吉休右衛門 鬼丸甚右衛門	戊辰薩藩戦死者墓 六勲位侯 爵松方正義書	大正四年卯十一月合葬 鍋島商店工作	東京	F 佐藤安之助一護 国神社13・大野 町下二股に墓石 あり 花田定吉一護国 神社12

正面台座右プレート一破損のため判読不可

正面台座左プレート一明治二年己巳四月廿四日函館市渡村二保ニテ戦死軍隊附夫卒佐藤安之助陸奥国津軽郡一丁目田村産・

同五月三十一日函館大川村ニテ戦死軍隊附夫卒花田定吉陸奥国津軽郡葛原村産・同五月七日函館ニテ戦死

二番隊戦兵田中泰蔵廿歳・同五月十一日函館桔梗野ニテ戦死三番隊長恒吉休右衛門廿四歳・同五月十

一日函館石川郷ニテ戦死三番隊戦兵鬼丸甚右衛門用二歳

■官軍海軍墓地

060	己巳役海軍戦死碑 甲鉄艦一等士官小林五郎、整武隊中川豊、同溝口岩熊、水夫梅田梅之丞、鍛冶清次郎 朝陽艦副長夏秋又之助、士官鬼塚麟之助、同野村金吉、同本莊豊馬、同牛島鹿之助、出納方土官乾監物、同山脇大三郎、士官山田為八、 楽生馬場農次郎、同山口亀三郎、舊古入村上源助、同富永孫四郎、同牧野英太郎、同山下清左右衛門、同衣川口蔵、水夫小頭恵 山光治、火焚小頭天野徳蔵、一等水夫繁蔵、同岩吉、二等水夫由太郎、同卯之助、同須作、同文二郎、同豊吉、三等水夫庄三郎、同 同総市、同虎吉、同勝平、同善之助、同久次郎、同梅二郎、同百次郎、同政八、同直吉、同善之助、同久五郎、同 重吉、同力三郎、一等火焚平治郎、同栄太郎、同重吉、同秀吉、鍛冶工兼同伊兵衛、二等火焚勘次郎、同末吉、同茂十郎、同 三等火焚茂七、同吉蔵、同幸次郎、同吉太郎、同艦乗組函館府在任隊伍長林六三郎、同川島由太郎、同菅原忠蔵、同統源二郎、同 宮本長吉、同浜田作蔵、同藤井文吉、同小沢清太郎、同菊地重太郎 春日艦一測量方一等士官和田彦兵衛、兵卒前田嘉七郎、水夫三迫宗太郎、火焚村上貞助、水夫上野太郎 飛龍艦一水夫虎吉 春艦一水夫上田太郎	1 護国神社58 函館府在任隊一 官軍海軍墓地61 春日艦和田彦兵 衛一官軍海軍墓 地62 飛龍艦水夫虎吉 一護国神社49
	(左横側) 余乗筑波艦航海到函港也来品此墓碑矣而碑中脱春日艦水夫上野太郎姓名因茲追刻迄於碑端 明治六年十二月 伊東海軍少將誌	
061	函館府在任隊 表一 函館府在任隊林六三郎源隆敬、川島由太郎源嘉照、浜田作蔵源成広、菊地重太郎藤原政守、宮本長吉平信清、藤井文吾 藤原信正、菅原忠作菅原清忠、統源治郎源忠正、小沢清太郎源吉季 明治二年龍集己巳五月十一日戦死于函港者也 裏一 承平之久紀綱頽靡□□而□□□□又將不能保社稷□□□□有人方今能復於古一新海内矣然人猶以有所□故幕田故諸藩 脱籍背叛逆徒甚多焉去冬十月廿四日脱党数千人來襲此底□官即出兵而制之衆不可敵乃遽于青森及今茲己巳初夏□□□□ 乃出師而海陸交討之至五月十一日脱党終潰而降焉蓋此九名之士皆函府之産而属隊長三□平太郎者此日与七十余人之隊士 同戦死于朝陽艦中矣吁壯士可謂得死所也歟今也親戚同隊之士勒其名于石俾余聊記其殉国難死之□云	2 護国神社58 官軍海軍墓地60

明治二年己巳秋八月下浣□□雄次撰					
062	和田彦兵衛	春日艦 [] 和田彦兵衛 [] 墓明治二年己巳 []		鹿兒島藩五代宅助 [] 建之司事向井新兵衛	3 護国神社58 官軍海軍墓地60
063	土屋伝太郎	土屋伝太郎直通之墓	亦從三月二日艦發浦賀之翌三日 到宮古洋時方子牌風浪顛起 直通立船首頗尽意適租	浪之來終落而亡時年六十一函 達函港假祭靈于招魂社傍明治 四年歲在年未三月日	4 御軍艦奉日水夫上長之任年今茲 辛未北海測量之行直通
064	黒阪浅右衛門	黒阪浅右衛門政次墓		明治四年辛未七月十日	5 御軍艦春日一等機関手試職

■実行寺

065	丸内久蔵	妙法随力儀勇男信士	明治元辰年十一月四日	備後福山藩丸内久蔵藤原義国	1 護国神社55
066	諏訪常吉	斗南旧藩諏訪常吉墓	明治二巳年五月十六日	広慶院心常日歎居士靈	2
067	諏訪部信五郎	諏訪部信五郎墓	徳川家臣砲兵隊長明治元辰年 十月廿四日於七重村戦争□□ 手負同年十一月廿二日卒辰年 □□歲	參州設楽郡新城今泉源助建之	3
068	三宅熊五郎	明治元戊辰年十二月十七日広 慶院義堂信士		房州勝山藩三宅熊五郎	4
069	石川祚胤	石川祚胤之墓	明治二巳年四月二十九日卒	尊徳院義同日光居士	5
070	大村卓次	大村卓次塔	慶応四年十二月建之		6
071	源太郎・春吉・秀吉	徳川勝宝丸源太郎・春吉・秀 吉墓		明治二巳年二月二十六日徳川 蒸氣船鑑破裂湯傷而死	7

■大円寺①

072	鮫島辰造	明治元戊辰年十月廿四日藤原 理尊志 鮫島辰造墓	戦重院立山良義居士	於七重村戦死	1 七飯町宝琳寺
-----	------	----------------------------	-----------	--------	-------------

073	河合要之助	河合要之助	備後福山藩士名則武戊辰十月二十四日大野村戦死	2 護国神社 2
074	中村孝六郎	明治元戊辰年十月二十四日源幸任□ 中村孝六郎	義忠院孝山徳□居士	3 七飯町宝琳寺

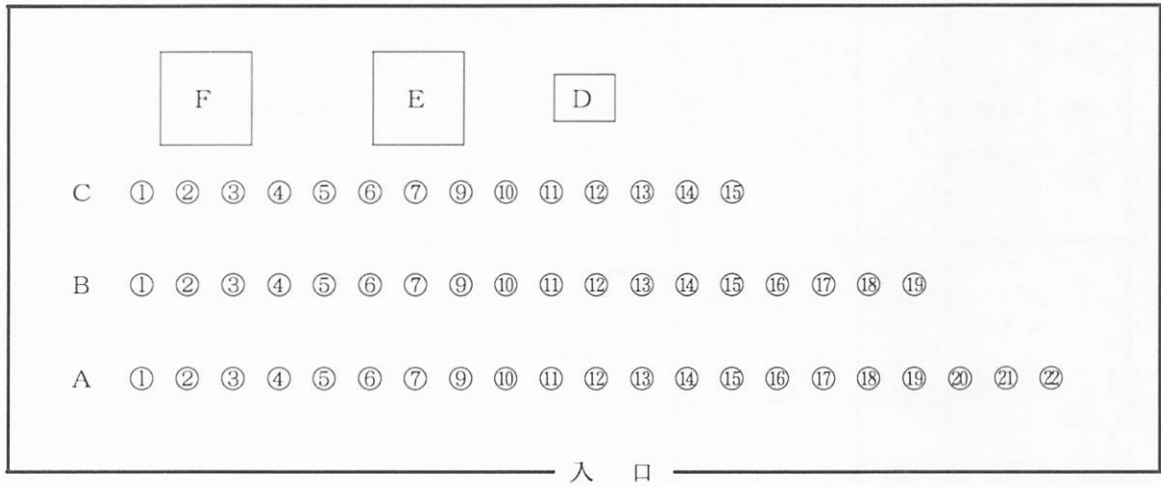
■大円寺②

075	杉浦誠娘	慶応三丁卯年正月三日春了院真心幻夢童女	箱館奉行杉浦兵庫頭勝誠女	4
076	宮路仙之丞	宮路仙之丞之墓	明治元年十一月廿二日没旧幕臣享年二十二歳	5
077	東浦重蔵母	歟宝妙喜信女	東浦重蔵母之墓	6
078		明譽然定願信女□□童女文久二壬戌年		7
079	齊藤静子	明治元年戊辰十月廿九日江沢正勝妻之墓	齊藤金十郎長女静子年十九	8
080	寺崎宇三郎	明治元年戊辰七月七日寺崎宇三郎墓行年十四	明治十七年八月十日建之寺崎直治	9
081		名取儀 []	慶応 []	10
082		梨本氏之墓	秋光孩女梨本徳太郎女文久三戊寅年六月廿二日 勇光善童女梨本覚蔵女文久三戊寅年九月六日	11
083	—	磨滅のため判読不可	磨滅のため判読不可	12
084	宮野初太郎	函館府砲兵宮野初太郎	明治二年四月廿四日戦死	13
085		幻光孩女	下宮氏 慶応元年乙丑正月十一日	14

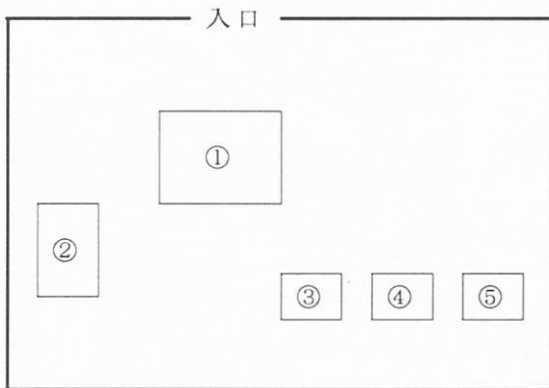
086	榊茂登	慶応二丙寅年四月廿三日室善 信女			榊茂登行年五十七	15
087	篠森宗賢	篠森宗賢墓			文久三癸亥十一月十七日没	16
088	林啓三郎妻・ 米三郎・仁三 郎	文久三癸亥年九月十七日俗名 米三郎 泰道廉孝童子 同年十月廿九日俗姓林啓三郎 妻 会清操院貞純守節大姉位 同年九月廿七日俗名仁三郎亭 敬童子				17
089	加藤金四郎男	智善童子靈位 九月五日		加藤金四郎男文久二壬戌年		18
090		春夢童女墓		万延元年庚申十二月二十七日	前田 []	19
091		文久元年酉九月六日法名釈連 円				20
092	斉藤金十郎	斉藤金十郎重春墓			玄峯通信居士	21
093		浄 [] 信士				22
094		戦勇院高志道居士		明治元辰年十二月廿七日	金三阿永大回向料高橋志平	23
095	本要輔	本要輔之墓		文久二壬戌年正月二十日觀誓 生音信士	木村源次郎父	24
096		文久元子年正月六日得室妙法 信女			大藤	25
097				嘉永五子年二月十六日	文久二戌年六月二日	26
098		迎誓好雲信女 念誓糸心信女			弘化四未年十二月四日	27

墓石位置関係概略図

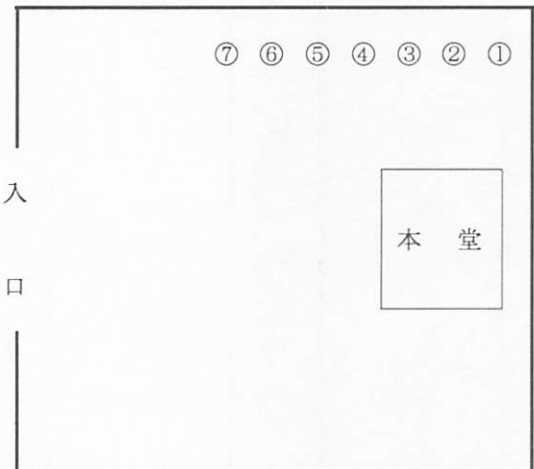
■護国神社



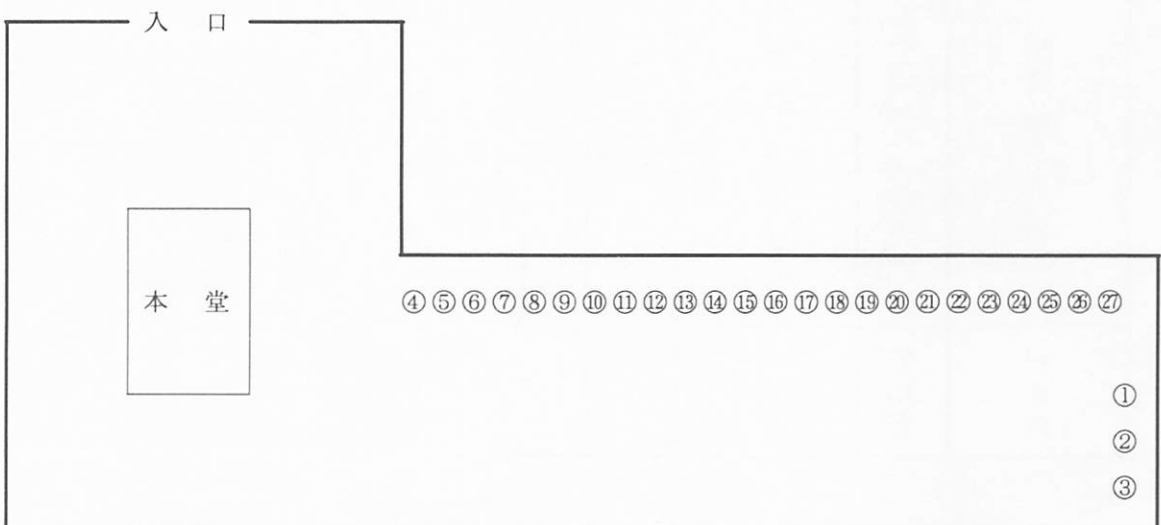
■官軍海軍墓地



■実行寺



■大円寺



調査カード

大田寺2

資料名	旧官修墓地 河合要之助 墓石碑			調査年月日	平成6年10月19日
所在地	函館市神山町3-4-1 浄土宗大田寺			製作年代	年 月 日
状態	墓石の表面が風化し、こけが付き、ぎざぎざした文字は読みにくい			材質	石材
				写真番号	HR-50251 HR-50252 HR-50253
	左	表	裏	右	
備考	護国神社に墓石碑あり			三並列の中	

彼の明快で豊かな色彩感覚は、函館という風光明媚な近代的都市の風物から、自然に体得した感性である。この街が、梁川剛一という画家を生んだのである。

そして彼自身が持っていた情熱と健康的な精神は、生命感に満ちた人物像を生み出し、永遠に少年少女たちを鼓舞する力を持っていると言えるだろう。

了

(挿絵画家研究家)

註

- (1) 昭和六年六月三日付け 渡辺徳治氏
- (2) 昭和五十四年制作
- (3) 昭和三十七年制作
- (4) 昭和三十一年発行
- (5) 昭和三十二年発行
- (6) 昭和十二年揚子江に停泊中の米軍艦を、日本軍が撃沈し、日米が緊張状態に陥る。この時在米の二世神父が「リンカーン」を大統領に送り、緊張緩和に役立てた。
- (7) 全三十八冊中、三十冊の表紙絵を担当し、八編の作品に描く。
- (8) 昭和十二年発行
- (9) 昭和十三年発行
- (10) 昭和十三年発行

参考文献

- 「旧制中学物語」 札幌市教育委員会編 昭和五十九年 北海道新聞社
- 「梁川剛一さしえ展」図録 平成三年 芸術の森美術館
- 『子どもの文化』 平成三年 子ども文化研究所編
- 『ヘカッチ』 平成六年 北海道子ども文化研究同人誌
- その他 資料協力 梁川美恵子氏・弥生美術館

くの手抜きをしない完成度にある。全てが、一点の名画のように見応えがあり、しかも子どもの心を捕らえる、ダイナミックな迫力に満ちている。

この揺るぎない作風を支えたものは、自らの甘えを許さない、強靱な精神力であろう。

そして、世界の絵本に引けを取らない日本の絵本作りを目指して、梁川剛一がこれらの名作を生み出したのは、彼が各民族の異なる顔を、骨格から描き分けることのできる基本的な技法を身につけていたためである。こういう児童向け画家が存在したということは、戦後の児童文化と児童の情操教育にとって、非常に貴重なことだったといわなければならない。梁川剛一がした仕事は、そうした後世に残してゆく画業であった。

剛一は、「過激と冷静の間を均衡を保ちつつ動揺せよ」という、ゲーテの言葉を好んだ。

彼が、これに近い体質を持っていたことは想像に難くない。しかし、この言葉と、剛一の一生を重ねてみると、「過激」

「動揺」より、「冷静」「均衡」に納得が集約される。

だが、もう一度剛一の絵を見てみたい。彼自身がつくり出したスタイルではなくアカデミックなスタイルで、これだけの個性的な人物像をひとりひとり描き上げるには、いかに過激な感情の傾斜を注ぎこまなければならないかということである。そういうものが吐露されていなければ、娯楽雑誌として、読者の感覚や官能までをくすぐらない。

アカデミックな手法をもっと崩して、際どい動揺のまま、彼自身のスタイルで描くことも、彼には可能だったはずだ。しかし、彼は、当時の挿絵や絵本が必要としていたものを、選んだのである。それが同時に、彼にしかできない仕事であっ

たということであろう。

永く、挿絵は、本画の亜流と位置づけられてきた。

挿絵とは、本質的に雑誌あるいは書物についての絵であり、物語についてのイラストである。

また、文化の基準を欧米の価値観に頼ることの多かった近代の我が国では、欧米の文化圏で、我が国ほどに発達がみられなかった児童向けの娯楽雑誌に、それ自体低い評価しか与えなかったことも指摘できる。

しかし、近年、挿絵の研究も進み、出版美術が日本の近代文化の中で果たした役割が、以外に大きいことは証明されつつある。

出版のマスプロ化や編集の形態の他、我が国独自の娯楽の特質性など、出版美術の発展を促した様々な外因に加えて、雑誌は、日本の画家たちにとって世界でも特殊な、発表の舞台として開放されていたという点も特筆したい。

剛一のような、読者におもねるためのデフォルメを加えない絵が、娯楽雑誌の中で不動の位置を確保したということも、日本の雑誌が持つ高い許容性である。

そして我が国の挿絵が、必ずしも本画の亜流と言い切れないのは、今後もっと証明されることになるはずであるが、剛一の挿絵は、主流と亜流の境界をとりはらったと言っているだろう。彼の挿絵の仕事は、日本の優れた出版美術を一層高め、日本の絵画史上の流れを変えることに、一石を投じたことである。

彼の絵は、現代でも少年少女に感銘を与える。そして現代でも彼の絵本や挿絵は、世界に通用するはずである。歴史のある街、世界に窓を開いた街函館が、そういう彼の絵と無関係ではない。

剛一とリンカーンの関わりは、それから続いた。彼は生涯に、平面作品だけで四八〇〇点ものリンカーン制作をすることになる。

しかし戦争中は、出版統制が起こり、刊行物の発刊はままならなくなった。更に剛一は、東中野の自宅を戦災で焼失し、一家は札幌の妻の実家に疎開することになった。

戦時中、札幌での彼の主な仕事は、絵本の出版社エルム社の設立・出版と、札幌で発行されていた雑誌『北の子供』(新日本文化協会)への投稿であった。

やがて戦後を迎え、彼は再び、『少年クラブ』(講談社)や、『ロマンス』(東西南北社)などの雑誌に描くようになる。そして、『講談社の絵本』『講談社版世界名作全集』(図5)、『小学館・ワイドカラー版少年少女の名作』などに活躍の場を移していく。また彼は、『世界名言集』・『こども伝記全集』(ポプラ社)、『世界偉人全集』(偕成社)などに、偉人と



図4

「リンカーン」(表紙) 昭和12年
講談社 『講談社の絵本28』
油彩・キャンバス 33.5×36.5cm

呼ばれたほとんど全ての人物と言えるほど多くの偉人像を描くのであった。



図5

「ジャングル・ブック」(ジャケット) 昭和27年
講談社 『講談社版世界名作全集21』
油彩・紙 22.0×12.8cm

十 最後に

以上のように、剛一の絵画制作の業績は、戦前を「雑誌の時代」とすれば、戦後を「全集の時代」と呼ぶことができる。戦前戦後の両方に跨がる、彼の「絵本の時代」は、戦中札幌で彼自身が設立した、エルム社の絵本作りに因んで、仮に戦中の主なる仕事として区分してもいいかもしれない。

もっとも、「全集の時代」を戦後に区分したもの、彼は戦前の昭和十二年に、『講談社版世界名作物語』の全巻装幀を行い、戦前の代表作として同全集中に、「巖窟王」^⑧「三銃士」^⑨「鉄仮面」^⑩などの挿絵が含まれているので、この点からも厳密な区分は当然不可能であるが。

因みに、この三点の力作は、彼が雑誌の連載や、口絵などの仕事を山のように抱えた多忙多作の時代、同時に制作された。剛一の挿絵の最大の優れた点は、そういう中であって全

る容貌や風格を与えて、魅力的な悪人として人格化した。この物語と挿絵が、少年たちの恐怖心を煽るだけに終わらず、彼らに文学的な実感と、小気味のいい爽快感を与えた要因には、乱歩の少年探偵世界を健全に解釈した、剛一の前向きな姿勢と健康的な描写によるところが大きい。

翌年「少年探偵團」は、単行本として発行された。(図2)

また彼は、昭和十三年のその年、『少年倶楽部』に、佐藤紅緑作「黒將軍快々譚」と共に、乱歩の少年探偵團シリーズ「妖怪博士」を、十五年には「新寶島」を描いた。

これらの小説挿絵は、剛一にとっても、その後彼が、世界中の物語を手がける絵本画家へと導かれる糸口となった。

剛一の絵の魅力は、躍動感のある肢体の皮膚の裏から滲み出してくる、生き生きとした鼓動や笑い声や体温である。その後の彼の絵にも、一貫して描き続けられたこれらの特徴は、単に彼のデッサン力の豊かさによるものだけではなく、剛一自身が持つ向日性の生命力の現れなのである。

九 絵本の時代

『講談社の絵本』シリーズは、昭和十一年に創刊された。

それまでの絵本と言えば、内容も前近代的な昔話を主とし、装幀も、「赤本」と呼ばれた絵草紙と変わらないもので、それらが路傍で二〜三冊並べて売られるというケースも少なくなかった。

この絵本シリーズは、そういう草紙風の内容や形態を一掃し、欧米風で近代的な絵本を目標とする、画期的な企画であった。昭和十七年までに二〇三冊を刊行した(戦後も再発行)この絵本シリーズは、オフセット印刷の技術の向上を含め、昭和の児童文化の一代エポックを担ったのである。



図3

「石の花」(表紙) 昭和31年
講談社 『講談社の絵本155』
油彩・キャンバス 32.0×32.0cm

剛一は、昭和十二年に、この絵本シリーズの第二十八冊目に当たる「リンカーン」を描く。以後彼は、この絵本シリーズに、「石の花」(図3)や「クオレ物語」など多数を描くことになる。

彼は、これらの絵本の原画を、たびたび油彩で描いたが、それは、第一作目の「リンカーン」(図4)のときからの試みであり、彼自身でこれを主張して、実行した。

水彩に統一されていた絵本の原画が、キャンバスに油彩で描かれるということは、製本コストに負担が掛かった。しかし、それでも彼が意思をひるがえさず、十五号キャンバスに描いたわけは、現在その絵本を見れば一目瞭然であるだろう。見開きページ三十二枚と表紙の計三十三枚は、それ自体タブローに等しい名画の連作である。

格調高い、本格的な絵本をめざした剛一は、顔つきまでリンカーンに似てくるほど、不眠不休でこの作品の制作に没頭した。この絵本「リンカーン」は、日米親善の役割を果たすなどのエピソードも豊富である。

成される。剛一が描き下ろした挿絵が二十五点を占め、勝一の挿絵は、昭和五年以来、百版以上版を重ねた挿絵からの転載で、十九点が掲載された。

両画家の画風は、むしろ異趣であった。剛一の描く線は柔軟であり、勝一の引く線は鋭利である。それが絵全体に及ぼす印象は、弾力性と、硬質性とに分かれている。しかしこの別冊付録「敵中横断三百里」の中で、両画家の挿絵は全く違和感を示さないのである。

剛一が、勝一の絵に画風を似せたとと思われる箇所はない。彼は、そうした上辺のテクニクを駆使したのではなく、勝一の挿絵を含むこの物語の世界に、ひたすら忠実でありたいと思ったのである。

顔の微妙な表情表現や、戦闘場面などの激しい動きの人物描写に優れていた剛一と、果てしない大雪原の様や、挺身斥候の孤独を象徴する不動の影に手腕を発揮した勝一に、それぞれ得意な場面を割り当てた編集も成功していた。そして、剛一は、この作品で、勝一に譲らない評価と人気を得たのであった。

このとき、『少年倶楽部』の若き読者と、その親たちは、確かな手応えのある作家を得たと確信したに違いない。時代は、これまで漂っていた大正ロマン風の揺らめくような情緒を抜けて、堅強な精神を育む絵を必要としていたからである。

もし、梁川剛一が挿絵を描かなかつたら、日本の大衆児童雑誌は、もつと軟弱な様相を呈したかもしれない。高島華宵の存在を失ったとき、講談社は読者を取り戻そうとして、吉川英治や大佛二郎ら少年小説を書く作家と、華宵に似た絵を描く画家を育成した。次は、華宵と大正ロマンを越える画家の出現が待たれていたのである。

八 「少年探偵團」

昭和十一年一月『少年倶楽部』は、江戸川乱歩の初の少年探偵小説を掲載する。この時の作品は「怪人二十面相」で、挿絵は小林秀恒（明治四十一年〜昭和十七年）が描いた。そして、翌年の二月より「少年探偵團」と名を変えて、新たに二十面相と明智小五郎率いる少年探偵團の、探偵物語が開始するのである。

剛一が、この連載小説の挿絵を描いた。

乱歩小説の卓越したストーリー性と言い、都会風な舞台設定と言い、怪人二十面相・明智小五郎・小林少年のゴールデン・トリオと言い、この作品のモダンで迫力のある作風は、剛一の画風とよくマッチして、彼の絵の特質を余すところなく伝えるものだった。

剛一は、明智の顔をまず塑像で作り、それを様々な角度から観察して、この理知と人間性に勝った名探偵像を、平面上に生き生きと書き写した。

また二十面相という謎の無国籍的な人物に、場面場面異なる



図 2

「少年探偵團」（単行本カバー絵） 昭和13年
講談社
水彩・紙 19.0×15.0cm

とくに彼の戦後の活躍の舞台である、世界の名作全集や偉人伝、絵本の絵などに見られる、少年や青年や、また女性たちの、その顔の表情からはみなぎるような存在感が伝わってくる。それは、夢二の美人画や華宵の美少年が、漂わせた妖艶なエロチシズムとは正反対の、健康美であり、セクシャリティである。

私は、それもまた、圧倒されるような生命のエロチシズムだと言いたい。

それだからこそ、梁川剛一の挿絵からは、アカデミズムを越えた、壮大なロマンが感じられるのである。

七 「敵中横断三百里」

剛一の『少年倶楽部』（大日本雄辨會講談社）におけるデビュー作は、昭和十一年一月号から連載された「黒い眞珠」（久米正雄作）であった。

四月からは、「魔海の寶」（南洋一郎作）の挿絵を担当し、連載中の「黒い眞珠」と同時掲載になるため、前者は松前潮という名前で揮毫した。

その間の三月、彼は「敵中横断三百里」の付録を描き、これは彼の代表作ともなった。（図1）

「敵中横断三百里」は、山中峯太郎の実録小説で、昭和五年既に本誌に連載され、空前のセンセーションを巻き起こす。このとき挿絵を担当したのは、樫島勝一であった。

そして昭和十一年、同誌では別冊として、前述の「敵中横断三百里」を付録に付けたのである。ここで梁川剛一は、樫島勝一と共に挿絵を担当したのであった。

剛一は、予てより勝一の絵を評価していた。

「画風を歴然と維持し、中でも独特のペン画にあっては、



図1

「敵中横断三百里」再制作 昭和50年
講談社 『リバイバル名作名画集』
水彩・紙 26.2×39.7cm

他の追従を許さない樫島勝一のペン画の様式を確保した功績は偉大なものがあると思います。」という一文を、剛一は昭和五十二年の「樫島勝一画集」（講談社）に寄稿している。

剛一が、続けてこの文の中に記すように、勝一のペン画とは、一本の省略も許さない超人的なテクニクであった。

最高の美術教育を受けた剛一が、独学であった勝一の絵に脱帽したとしてもおかしくはない。剛一が芸術上の理想としたものは、勝一と同じものだったからだ。それは、確かなテクニクにより、時代を越え、後世に残る作品を描くことなのであった。

別冊付録「敵中横断三百里」の挿絵は、総数四十四点で構

そうした中で、仕事を始めるには、挿絵画家としての相当の力量を発揮しなければならなかった。他の無数の挿絵画家の中で、剛一が優れていた点は、言うまでもなく彼がどんな絵でも描きこなす、アカデミックで基礎的な能力があったという点であろう。また、彼が彫刻家であったということも、特異な点として挙げられるかもしれない。

しかし挿絵の魅力は、本来タブローとは別のものだった。挿絵という絵そのものが、タブローとは価値観が違っていた。それは、物語をイラストレートする目的の絵だから、と言うばかりではなく、雑誌といういわゆる娯楽メディアは、文学で言えば、例えば純文学と大衆文学という分け方があるのうちに、自然と別のものを指向したのである。

大衆娯楽雑誌は、児童向けであれ成人向けであれ、営利上の目的からも、知性より感性に訴えかけるものでなければならなかった。とくに幼少時に我々が目にした雑誌の中の絵は、学校で教えられる、言わば「公の絵画」とは異なり、家庭で眺める「私の絵」として、むしろ強く感覚の中に残存している場合が多い。

そうした絵の持つ最大の価値判断は、読者がいかに自分自身の本質的な部分と接点を持つかということであろう。本質とは、本能であり、無意識の分野であり、その人の感覚の原点と言ってもいい部分かもしれない。

そうした挿絵を描く作家は、彼自身も際立った個性を持っていたと言える。彼らには、数知れぬ流行画家の中から、彗星のごとく現れて複数のページを制覇する才能や、一定の人気を獲得して一城を築くような才覚もあった。

ただ、逆に本能や感覚に訴えるというものは、恒久性や普遍性とは対局にあるものだ。これがメディアとなる場合、根

無し草のように流行や人の気まぐれに玩ばれて、消耗品となってしまう。それがまた、短い幼少時の鮮烈な思い出の要素ともなるのであろう。挿絵は、そういう意味では正統の絵画史には残らない幻想画なのである。

その中で、梁川剛一はどんな個性を発揮しただろうか。

六 剛一の挿画論

剛一は、昭和五十年に「わたしの挿画論」という文章を、「梁川剛一挿画大集」(講談社)に載せている。

彼は、その中で、挿絵はアカデミックでなければならぬと言う。その意味は、文章に忠実な描写ができることであるとしている。つまり、挿絵は、文章を正しく伝えるための、誰にでも理解できる絵画であり、そこには伝統的な技法が要求されると言うのである。

「表現のバックボーンとなる構想の設計には、自己主張は絶対にさけなければなりません。」

剛一が、今日まで忘れられない挿絵画家として、人々の心を捕らえるのは、確かに彼の優れたアカデミズムによるものであろう。しかし、たとえば竹久夢二が、独学で挿絵を描き、挿絵史上に名を残したように、私は剛一がアカデミズムだけで、その魅力を今日に伝えているのではないと思う。

彫刻家の剛一が、挿絵を描き始めたとき、動機はどうであれ、彼はどちらにも同等の力を注いだ。「全力投球であった」と語っている。彫刻だけでは家族を養えなかったための全力ではなく、それが彼自身の芸術家としての使命感だったと思えるのは、その挿絵の中からは脈脈と、子どもの心に訴えかける命の躍動が伝わってくるからだ。

剛一の描く人物は、必ず生命感に溢れている。

技」を出品して入選する。

翌年、第八回帝展には、「審判」を出品し、続いて入選。その年、彼は、東京美術学校彫刻科塑像部を首席で卒業した。卒業制作の「懊悩」は、卒業制作コンクールで一等となり、これに着色して出品した作品は、第九回帝展で入賞となった。卒業後、剛一は家族と共に、約一年函館の実家に身を寄せる。この間にも、彼は彫刻の制作を重ね、「高田屋嘉兵衛」のエスキースなどが作られた。この像は、現在函館山を背にして立つ函館のシンボルの彫像の「高田屋嘉兵衛」となって、彼が昭和三十三年に完成させる作品であった。

四 剛一と挿絵

昭和四年に函館を引き上げた剛一は、東京の高田馬場に居を構えた。

そして彼が、本格的に挿絵を描くようになったのは、昭和六年、『小学二年生』（小学館）の見開きページに「動物の花見」という口絵を描いて以来であった。

筒井敏夫という、児童小説家の紹介による掲載だった。

当時は、絵だけでは食べていけない画家のほとんどが、雑誌に挿絵を描いて生計をたてた。

逆に言えば、当時の少年少女雑誌には、優れた絵画作品が満載されていたということだ。

剛一夫妻には、長女ルリ子と、次女美恵子が誕生していた。彼は、当初彫刻制作の傍らのアルバイトとして、挿絵を引き受けたのであった。

ところで、梁川剛一という作家は、当時から今日まで、彫刻家と挿絵画家の、ほぼ同程度の評価と知名度を保ってきた。たとえば多くの人は、美術に関心がなくても、北海道大学

のクラーク博士のレリーフとさえ「少年よ大志を抱け」を想起するし、長崎グラバー園のマダムバタフライと言え、⁽²⁾「蝶々夫人」⁽³⁾像を思い出す。それらの作者が、梁川剛一なのである。

また、多くの人が、『少年倶楽部』に「敵中横断三百里」を描いた画家、あるいは『講談社の絵本』で「リンカーン」を描いた人と言え、⁽⁴⁾「ああ！」⁽⁵⁾と言う。それが梁川剛一なのだ。

剛一は、昭和六十一年四月二十六日、八十四歳で死去するが、その前年まで彫刻の仕事が続いている。昭和九年に第十五回帝展の特選を取ってからは、無鑑査であった。

そして挿絵は、最後まで筆を捨てなかった。絶筆は没年に当たる年の「キリスト」である。

梁川剛一は、名実共に「彫刻家であり、同時に挿絵画家」であった。

彫刻家として認められた昭和十年代が、挿絵画家として成功し、東中野にアトリエ付きの家を作ることができた時代に当たることも、このことを裏書きする事実だと言えよう。

五 挿絵画家

明治時代の末から昭和時代初期にかけて、出版文化は「挿絵の黄金時代」を迎える。とくに少年少女向け雑誌における挿絵画家の活躍は、百花繚乱のごとく華やかであった。

テレビのない時代、雑誌は最高の娯楽であり、中でも挿絵は、現代の映像文化に代わる強烈な視覚文化の一端を呈していた。評判のいい挿絵画家の絵は毎号登場し、その画家たちを、熱狂的なファンが支援し、彼らは現代のスター並みの人気を博したのであった。

らの指を切った血書で求婚する、増井多津子（戸籍はタツ）との出会いなどからは、情熱的で積極性に富んだ、彼の人間姿勢が窺い知れる。

剛一の一生に、大きな転落の時期や、暗転の出来事というものはない。質草も失うほど貧窮する時期もあれば、戦争も体験している。更に芸術上の葛藤は、社会や人間関係に関する等しなみの課題以上に、少なくはなかったはずである。

しかし、健康的にも家庭的にも才能的にも、不運でも不幸でもなかった彼の生涯は、総じて恵まれていたと言えるだろう。

青年時代、ナポレオンの絵は元より、「森の処女」（ビョルソン作）の一場面を絵に描いてみたり、島崎藤村を愛読して大いに芸術に親しんだ剛一が、同時に理数系にも秀でていたことは、彼がいかに才能豊かな人であったかを物語るものである。

大正十二年、二十一歳の年、剛一は東京高等工業学校（現、東京工業大学）応用科学科を受験する。

しかし、彼はその受験に失敗する。そして上京中に上野の博覧会で観た彫刻に感動して、東京美術学校（現、東京芸術大学美術学部）を受験、これに合格する。

彫刻科塑像部への入学を、剛一は、兵役逃れのためであったと語っている。

だが、翌年彼は、再び東京高等工業学校への受験に挑んだ。

このことの背景には、東京美術学校入学と同時に、予てよりの婚約者であった多津子と、東京目白に所帯を持った彼の、将来的な生活設計が掛かっていたと推測される。彫刻や絵では、簡単に生活は成り立たなかった。

しかし受験のための予備校通いの結果は、美術学校の出席

不足をまねき、剛一は退学寸前となった。そこで彼は、その後は成績向上に努め、年内には特待生になるという約束を交わし、この条件で在学を許可されるのである。

彼は、ここで、事実上応用科学と縁を切る。

しかし、後年多忙の創作活動の中にあつてさえ、彼が、科学的な技能と関心を、生涯にわたって持ち続けた事実は、たびたび閃くアイデアから実際に作り上げてしまう発明品によつて、計り知ることができる。

剛一は、若き日に応用科学を目指した理由の一つは、発明家になったかったためだと、述懐している。

発明品の中には、特許を取った楕円を描くコンパス、どこからでも立体的に見えるテレビ、自動楽譜捲り機、雨の日にバスを降りるとき、自動的に開く雨避けなど数知れなかった。

三 彫刻家として

東京美術学校在学中の大正十三年、多津子が長男襄児（じょうじ）を出産する。多津子二十歳、剛一二十二歳であった。

彫刻家として生きることを決意した剛一は、約束通り優秀な成績を修めて特待生となった。

彼の人生は、いわば成功者が歩む、正統派の生きざまであり、生涯を通して破綻の少ない、芸術家にはむしろ稀なタイプであった。

剛一は、授業料免除の特典を得たために、親からの仕送りを絶たれた。この時代、剛一はどん底の貧乏暮らしをする。

だが、彼の周辺には、美術学校の教授である北村西望を初め、朝倉文夫や建畠大夢ら優れた先達があり、彼らからの励ましと、学友たちの友情に支えられるのである。

大正十五年、剛一は二十四歳で、第七回帝展に処女作「競



梁 川 剛 一（昭和29年）

生後すぐ亀太郎の兄鶴松の養子となり、函館市旭町で十三歳までの少年時代を過ごした。

函館市東川小学校（尋常科）、及び函館市宝小学校（高等科）の時代、剛一はナポレオンが大好きという少年で、得意な絵で、多くのナポレオン像を描いた。

卒業時、学友に贈った一枚のナポレオン画が、三十年後の剛一の許に届けられた。添えられた書簡には、親友であり、函館の生んだ天才画家梁川剛一の絵を、それまで何よりも大切に保管していたことと、その鬼才振りを伝える絵をもう一度彼自身に見せたかったことが、少年時代の思い出と共に記されていた。

水彩による葉書大のこの絵には、後年、数知れぬほど多くのナポレオン等、世界の偉人像を描いた剛一の才能が萌芽している。

なぜ剛一がナポレオンの絵を幼少時代から描き続けたか、なぜ、親友が三十年もの間、剛一の偉人画を持ち続けていたか、そういうことをここで真剣に問題化するのには、客観的な

視点から離脱するが、敢えて一言差し挟ませてもらえば、運命の糸や宿命というものの存在に思いを馳せざるを得ない。

梁川剛一ほど、生涯を通して、ナポレオンを少年たちのために描いた画家はいないだろう。そして梁川剛一という画家の描いた世界の偉人画を、どれだけ多くの人々が、少年時代の思い出として懐中に留めてきたことだろう。

まるで剛一少年には、人生の方向が定められ、自分自身が果たす生涯の仕事を、予知し準備してきたようである。少なくともそれは無垢なる少年時代から、彼がほんとうに望んだ仕事だったということに間違いはない。

十四歳で剛一は、鉄道員であった父親の転勤で、札幌市北四条西七丁目に移居し、北海中学に入学した。

北海中学は、のびのびとした校風の私立中学であり、小説家となった子母沢寛、島木健作（共に中退）ら、多くの芸術家たちが巣立った学校である。

剛一は、ここで応援団に入団する一方、札幌の美術界を担うことになる画家たちを育てた「団栗会」という美術部に所属して、のちに彫刻家となった本郷新らと、絵を描いていた。

二 青年時代

剛一のナポレオン熱は、中学時代も続き、「ナポレオン大將」というあだ名までついた。

ナポレオン・ボナパルトという一勇者への傾倒ぶりや、彼自身応援団での副団長としての活動など、この頃の剛一からは、男性的で勇壮なことへの関心事が浮き彫りにされる。

南米雄飛という、夢も持っていた。

一方彼は、ロシア文学・フランス文学を愛好し、熱心に図書館通いをする文学青年でもあった。そして十九歳の年、自

せた。

人々は彼らの絵から、帝展などで観る絵とは別の、あるいは浮世絵や絵草紙とも異なる、もっと自分の感覚に近い、当時の美意識やファッションなどの風俗・文化を見て取り、吸収しようとしたのである。

しかし、諸雑誌の中には、伝統的な日本画風のタッチによる、歴史物語絵や軍記物なども描かれ、様々な挿絵が盛り沢山に掲載された。

いずれにせよ、雑誌の編集そのものも、挿絵も、一般人の生活や日常の意識、時世の動きや方向に敏感であり、そうした世俗性や流行を基盤にしていた。したがって、雑誌の形態や内容、挿絵のテーマやモチーフは、その時々のお出来事や、社会感情を如実に反映していた。

挿絵画家の活躍の変動や、人気の衰退も、現代のタレントのように推移した。

四 挿絵画家と印刷技法

明治二十年代には石版印刷が盛んになり、木版とは味の違う美人画などが刷られ、三十年代には三色印刷も行われた。

四十年代に入ると、オフセット印刷の方法が導入されたが、挿絵は、木版画によって紹介されることも多かった。

この時代を代表する挿絵画家としては、夢二の名があげられるが、彼の初期の挿絵作品の特徴は、たつぷりと墨を含んで走るような早い筆致や、消え入りそうな細い筆先が、何度も輪郭をたどるような線にあり、それらは木版で活かされていた。

彼はまた、日本画・洋画・浮世絵風の版画から、挿絵・商業デザイン・立体に至るまで、幅広く創作の場を広げたマル

チタレントでもあった。

大正末期、夢二の後を受け、挿絵で頭角を表したのが高畠華宵^{かしやう}（明治二十一年～昭和四十一年）や、加藤まささ（明治三十年～昭和五十二年）、^{あきや こうじ}露谷虹児（明治三十一年～昭和五十四年）ら、抒情画と呼ばれる少女絵のジャンルを得意とした挿絵画家であった。

とくに高畠華宵の絵の特徴は、リアルで鮮烈な線描写にあり、この線は、当時の雑誌出版に使われた凸版印刷によって鮮やかに伝えられた。

華宵は、少年を描くのも得意であり、とくに『少年倶楽部』で絶大な人気を誇っていた。しかし大正十三年末、画料の問題がこじれ、彼は講談社の一切の仕事から手を引く。華宵なきあと、『少年倶楽部』からデビューするのが、伊藤彦造（明治三十六年～現）、山口将吉郎^{やまぐち しょうきちろう}（明治二十九年～昭和四十七年）、^{かはしま かついち}樫島勝一（明治二十一年～昭和四十年）らの画家たちであった。

出版は、平版印刷によるオフセットに時代に入っていた。

この時代は世界大戦の時局で、挿絵もその気運を受けた戦争物・冒険物などのテーマが多く、勇壮かつ危機迫る描写が主流を占めた。

梁川剛一は、こうした雑誌の舞台の中から、昭和十年ころ登場する。印刷は、写植機の実用化が開始されつつあった。

一章 梁川剛一の挿絵

一 出生と少年時代

梁川剛一は、明治三十五年三月三十日、梁川亀太郎・ヨコノ長男として函館に生まれた。

した竹久夢二（明治十七年～昭和九年）の存在が大きい。

夢二の処女画集は、彼自身のコマ絵を集めた『夢二画集 春の巻』（明治四十二年発行・洛陽堂）であった。

竹久夢二は、現代では一般的に、飛び抜けて個性的な絵を描いて、特殊な画風を作り上げた画家として有名であるが、実際には当時、渡辺与平（明治二十年～明治四十四年）ら、酷似したスタイルで描く画家が他にも多くいた。

彼らは一様に、伝統的な大和絵や浮世絵の画風から離れ、西欧の絵画、とくにアール・ヌーヴオーなどの世紀末美術から影響を受けた絵を描き始めた画家たちであった。

ただ、その中で夢二一人が、現代にまでその名を残した理由は、挿絵（またはコマ絵）におけるスタイルだけではなく、もっと他に、彼にしか持ちえなかった強いオリジナリティが存在したためであると言える。

三 近代挿絵

前代の木版画の後を受けた近代の挿絵が、一層の発達を遂げるに至ったのは、印刷技術の進歩に伴う、出版物の大量生産が行われるようになったことによる。

そして挿絵画家と呼ばれる画家たちが、新たな脚光を浴びるようになったのも、大正時代を中心とする明治時代末から昭和にかけての時代区分における、雑誌という印刷文化の上からであった。

この時代の、雑誌における挿絵の目ざましい発展によって、我が国の、近代出版美術は確立されたと言っている。

近代挿絵は、諸雑誌の中でも、少年少女向けの娯楽雑誌に顕著であり、この時代の大衆文化の担い手となる傑出した作家は、これらの雑誌から輩出された。

本稿の二章で述べる梁川剛一は、主にこうした少年少女向け雑誌の中で活躍した作家であった。

当時創刊された、代表的な少年少女雑誌を挙げると、『少年世界』『幼年世界』（博文館）、『日本少年』『少女の友』（實業之日本社）、『少女画報』（東京社）、『少年倶楽部』『少女倶楽部』（大日本雄辯會講談社）、『新少女』（婦人之友社）、などがあり、これらは明治時代末期から昭和初期にかけて次々と発行され、出版文化と出版美術を形成する舞台となったのである。

このことの背景には、大正リベラルの風潮により、子どもの文化に新たな光が投げられたこともあげられる。

挿絵は、従来、物語などの文章理解を補助したり、円滑にするものであると同時に、視覚を楽しませるものであった。大正期の雑誌における挿絵は、表紙絵や口絵まで含めれば、文章から一層自立した美術的な形で、雑誌の構成上重要な役割を分担したのである。

また、この時代は、日本人の一般庶民が個人のレベルで、欧米化を生活の中に取り入れようとした時代でもあった。

「ハイカラ」と呼びならわされた、海外のモダンズム文化の文物を、いち早くモチーフにしようとしたり、美術的手法そのものにヨーロッパ絵画の匂いを載せた絵は、この時代の大衆娯楽雑誌や女性向け雑誌にとっても、なくてはならないビジュアル上のセールスポイントであり、これらが後の我が国の視覚文化の発達に及ぼした影響は大きい。

中でも、明治時代末期から大正時代の初めの、竹久夢二らによるヨーロッパ的なモダンズム絵画は、雑誌という大衆娯楽の舞台で、アカデミックな日本画や洋画とは一線を画した「抒情画」というポピュラーアートの分野を開拓し、流行さ

挿絵史にみる梁川剛一

小笠原 洋子

一章 挿絵の歴史

一 挿絵前史

挿絵とは、現代で言うイラストレーションであり、文章の理解を補うものとして発生、発達した。

挿絵の歴史は、奈良時代の経典における絵解きや、平安時代の絵巻物や、室町時代の奈良絵本などに遡ることができる。挿絵の発達は、印刷技術と出版文化の発達との関わりを抜きには語れない。

出版は、古くは筆写の方法で行われたが、板に文字を彫り、これに墨を塗って、紙に摺り出すという初期の印刷手法も、古代より行われていた。

近世初頭、朝鮮とヨーロッパから輸入された活字の技術は、印刷文化を促し、印刷職人を生み出した。この頃から、我が国における出版は、本格的に開始された。

しかし、我が国では、版木を原版とする木版が中心であり、江戸時代には、木版による、世界でも屈指の出版文化が開花したのである。

当時の、木版印刷による出版文化の育成は、文字の美しさや多色刷の技術、また芸術性の高い装幀などに認められるだけではなく、それらの出版物が一般に流布する土台としての、

流通経済社会の発達と無関係ではなかった。

二 絵草紙とコマ絵

江戸時代は、出版文化の中心も、上方から江戸に移った。この大消費経済都市において、出版は、流通ルートが整い、営業も成立したのである。この時代の出版文化を代表する、書物や浮世絵版画が、江戸文化全体の中で担った役割は大きい。

当時、挿絵は、「絵草紙」と呼ばれる和綴じの木版本、とくに子ども向けに読解し易く編まれた「赤本」と称される物語本の中に取り入れられた。

版木に彫られた、流麗な書体の、仮名まじり文字と一体化した木版画は、和紙面上に墨色または濃い色刷を特徴とし、これは、世界にも類を見ない書物史上の美本として、我が国の近代大衆娯楽雑誌の前身に位置づけられる。

明治期には、新聞紙面に、時事などの風刺絵が盛んに登場する。これもまた近代挿絵の先駆けになった。

この、いわゆる一コマ漫画は、当時「コマ絵」と称され、雑誌にもカットとして載った。

「コマ絵」が、日本の挿絵の発展に与ることになった経緯には、明治三十年代末にコマ絵の投稿作家としてデビュー

市立函館博物館 研究紀要 第7号

1997年3月31日 発行

編集・発行 市立函館博物館

〒040 函館市青柳町17-1 (函館公園内)

TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

印刷 (有) 三和印刷

〒040 函館市海岸町8-11

TEL 0138-45-0845 FAX 0138-43-3594

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

CONTENTS

Preface

KIYOSHI MURAKOSHI : Cultural exchange by Jyomon people
across the TSUGARU straits.

TOMOHARU HOSHINA : Investigation on the gravestones related to the Hakodate War.
—Summary of the workshop
“Investigation on the Historical Sites of the Hakodate War” —

YOKO OGASAWARA : A study of Goichi Yanagawa.
—from the history of illustrations—

1 9 9 7

Publisher : Hakodate City Museum

17-1, Aoyagicho, Hakodate City, Hokkaido 040, Japan

Tel 0138-23-5480 Fax 0138-23-0831